

貝塚市埋蔵文化財調査報告第9集

貝塚市遺跡群発掘調査概要Ⅶ

1985・3

貝塚市教育委員会

はじめに

わたくしたちの先人が残した歴史的・文化的遺産である埋蔵文化財は、今、開発の名のもとに人知れず消え去ろうとしております。

また、当泉州地域におきましては国家的事業とでもいえる関西新国際空港の建設が控え、ここ数年の間には発展したまち、泉州が築かれることになるでしょう。

こうした情勢の中で、わたくしたちの先人が残した足跡をいかに後世に伝え現在のわたくしたちの生活にいかに生かしていくべきか、今、それが問われている時期でもあります。

本年も貝塚市では国・府補助金を受け、宅地開発などに伴う緊急発掘調査を実施してまいりましたが、その調査結果をここに概要として報告するとともに、先人の残した長い歴史の一端を現在に生きるみなさま方に、少しでも理解していただければ幸いかと存じます。

なお、発掘調査ならびに本書の作成につきましては、関係各位より多大のご協力とご指導を得ましたことを末筆ではありますが、ここに記して感謝の意を表します。

1985年 3月

貝塚市教育委員会

教育長 岡 根 和 雄

例 言

1. 本書は貝塚市教育委員会が国庫補助事業として、昭和59年度に実施した、貝塚市域における緊急発掘調査にかかる調査結果報告である。
2. 発掘調査は貝塚市教育委員会社会教育課 西岡巖が担当し、現地調査・整理作業および本書作成にあたっては、下記の諸氏の参加を得て実施したものである。
嘉積由彦、田中明美、吉田房子、山下展功、小林修、石橋秀仁、山西宏司、山本和枝、芝野久美子。
3. 本書の編集・執筆については西岡が行い、遺構・遺物のトレースおよび、遺物写真については嘉積の協力によるところが大きい。
なお、本書中、出土遺物については写真図版および実測図において同一のものは、同一番号を付している。

目 次

はしがき
例 言
目 次
本文目次
図版目次
挿図目次

本 文 目 次

第一章 調査地区の位置と環境	1
第二章 調査概要	3
1. 貝塚寺内町遺跡の調査	3
はじめに	
遺 構	
遺 物	
おわりに	
2. 澱池遺跡の調査	10
はじめに	
遺 構	
遺 物	
おわりに	
3. 加治・神前・畠中遺跡の調査	13
はじめに	
A地区の調査	
B地区の調査	
C地区の調査	
おわりに	
4. 窪田遺跡の調査	21
はじめに	
遺 物	
おわりに	

図版目次

- 図版1 貝塚寺内町遺跡
(1)調査区全景 (2)同 上
- 図版2 貝塚寺内町遺跡
(1)検出遺構部分 (2)検出遺構部分
- 図版3 貝塚寺内町遺跡出土遺物
- 図版4 貝塚寺内町遺跡出土遺物
- 図版5 貝塚寺内町遺跡出土遺物
- 図版6 貝塚寺内町遺跡出土遺物
- 図版7 貝塚寺内町遺跡出土遺物
- 図版8 貝塚寺内町遺跡出土遺物
- 図版9 澱池遺跡
(1)調査区全景 (2)同 上
- 図版10 澱池遺跡
(1)検出遺構 (2)トレンチ断面土層
- 図版11 加治・神前・畠中遺跡A地区
(1)調査区全景 (2)同 上
- 図版12 加治・神前・畠中遺跡B地区
(1)第1トレンチ全景 (2)同 上
- 図版13 加治・神前・畠中遺跡B地区
(1)第2トレンチ全景 (2)同 上
- 図版14 加治・神前・畠中遺跡B地区
(1)第3トレンチ全景 (2)同 上
- 図版15 加治・神前・畠中遺跡C地区
(1)調査区全景 (2)同 上
- 図版16 加治・神前・畠中遺跡C地区
(1)検出遺構 (2)同 上
- 図版17 加治・神前・畠中遺跡C地区出土遺物
- 図版18 加治・神前・畠中遺跡C地区出土遺物
- 図版19 窪田遺跡
(1)第1トレンチ全景 (2)同 上
- 図版20 窪田遺跡
(1)第1トレンチ (2)第1トレンチ

- 図版21 窪田遺跡
(1)第1トレンチ 土壌1
(2)第1トレンチ溝1断面
- 図版22 窪田遺跡
(1)第2トレンチ全景
(2)第2・3トレンチ全景
- 図版23 窪田遺跡
(1)第4トレンチ全景 (2)同 上
- 図版24 窪田遺跡
(1)第5トレンチ全景 (2)同 上
- 図版25 窪田遺跡出土遺物

挿図目次

- 第1図 貝塚市遺跡分布図
- 第2図 調査位置図
- 第3図 調査区域図
- 第4図 遺構実測図
- 第5図 出土遺物実測図
- 第6図 出土遺物実測図
- 第7図 調査位置図
- 第8図 調査区域および遺構平板測量図
- 第9図 調査位置図 (A地区)
- 第10図 調査区域および遺構平板測量図
(A地区)
- 第11図 調査位置図 (B・C地区)
- 第12図 遺構実測図 (B地区)
- 第13図 調査区域および遺構平板測量図
(C地区)
- 第14図 C地区出土遺物実測図
- 第15図 調査位置図
- 第16図 調査区域図
- 第17図 遺構実測図
- 第18図 出土遺物実測図

第一章 調査地区の位置と環境

貝塚市は、大阪府の南部、大阪市と和歌山市のほぼ中間点に位置し、東西14.3km、南北4.8kmの山間部から海岸部に向かって細長く伸びる行政区域である。その北西は大阪湾を隔てて六甲山系、淡路島を遠望し、南は和泉山脈を経て和歌山県との境となる。和泉山脈より流れ出し貝塚の平野部を横断する河川としては、北辺部を流れる津田川、市域の中央部を流れる近木川および南接する泉佐野市と界する見出川の河川が大阪湾に注いでいる。

地形的には和泉山脈に近く急な傾斜地や、やや深い谷地形を有する山間地から中部洪積地、および海岸部に接する沖積地に大別できる。

市内に所在する各時代の遺跡も市全域に存在するが、その多くは中部洪積地を中心に広がっており、今回発掘調査を実施した貝塚寺内町遺跡、澱池遺跡、加治・神前・畠中遺跡並びに窪田遺跡の各地区も大きくは中部洪積地に位置する遺跡である。

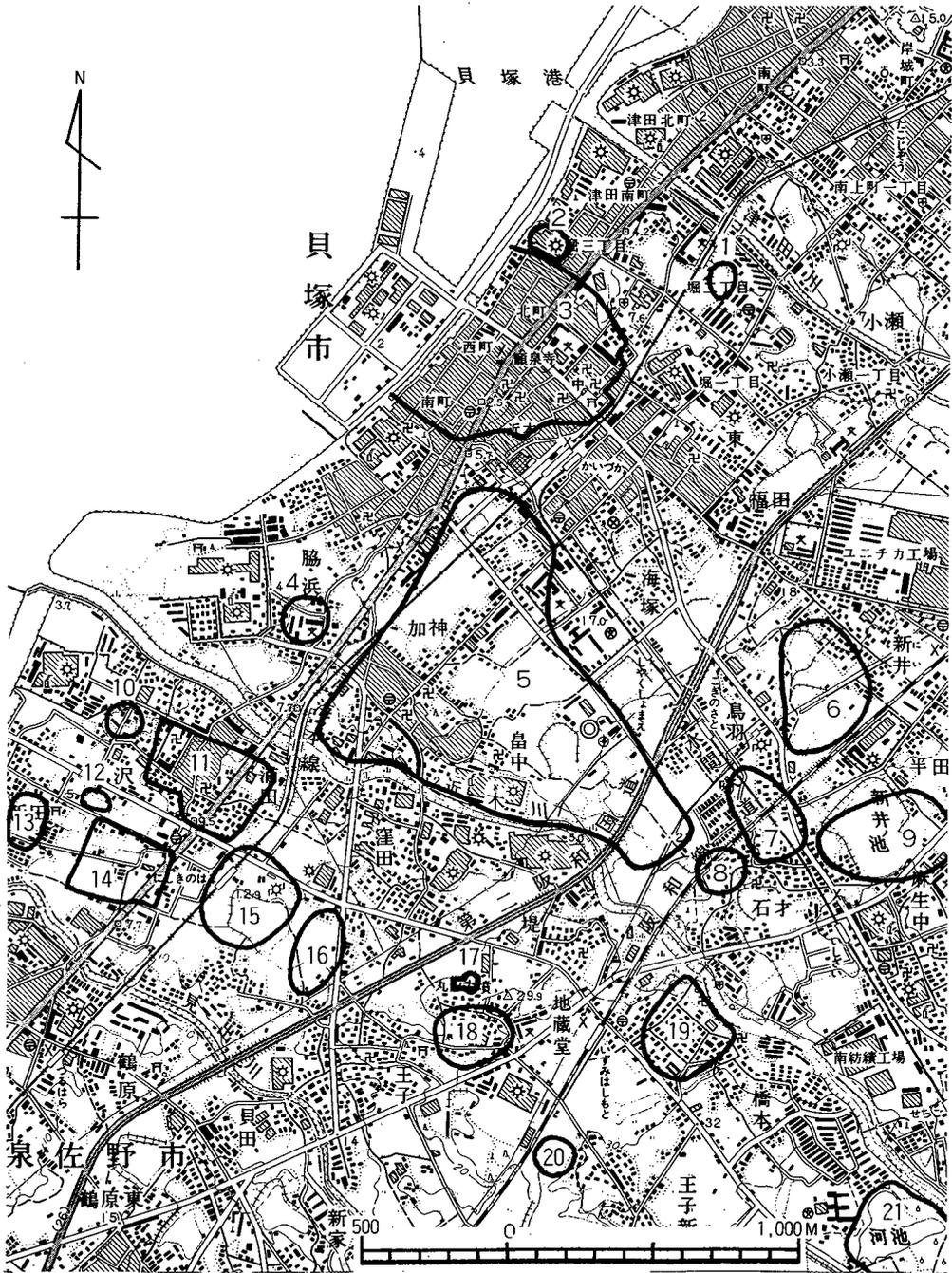
貝塚寺内町遺跡は洪積地が海岸部に突出する最突端部に位置する願泉寺を中心に中世都市として発達した町並であり、現在の南海本線貝塚駅北西部に東西約0.6km、南北約0.8kmの広がりをもつ町並である。今回の調査はその貝塚寺内町の中心地ともいえる願泉寺境内の一角を発掘調査した。

加治・神前・畠中遺跡は貝塚寺内町遺跡の南方に位置し、近木川の北岸部に沿って現在の南海本線より第二阪和国道を経て国鉄阪和線沿いに広がる南北約1.0km、東西約1.3kmの弥生時代から室町時代にかけての集落遺跡である。今回の調査は本遺跡地のほぼ中央部に位置する個人住宅建設予定地、3箇所について発掘調査を実施した。

澱池遺跡は加治・神前・畠中遺跡の南西方向に位置し、南海本線二色ノ浜駅のすぐ山手側に位置する澱池を中心として広がる遺跡で、貝塚市の中央部を流れる近木川と泉佐野市と界する見出川とのほぼ中間点に位置する。海岸部からは約1kmほど内陸部にはいった海拔約10～13mの平坦地域である。遺跡の範囲は南北約0.3km、東西約0.3kmで澱池を包含し、周辺の耕作地および南海本線二色ノ浜駅をも含んだ形で広がっている。今回の調査は昨年度調査地区のすぐ西側において個人住宅建設に伴って実施したものである。

さらに、澱池遺跡の東側には弥生式土器や古墳時代の須恵器片等が散布している窪田遺跡が南北約0.3km、東西約0.15kmの範囲で接しており、今回の調査地区の1つとして当遺跡のほぼ中央部にあたる一地区をも発掘調査した。

以上、発掘調査を実施し、今回報告する地区は貝塚寺内町遺跡内で1箇所、加治・神前



1. 堀遺跡
2. 泉州麻生塩壺出土地
3. 貝塚寺内町
4. 長楽寺跡
5. 加治・神前・畠中遺跡
6. 新井鳥羽遺跡
7. 石才遺跡
8. 橋本遺跡
9. 新井ノ池遺跡
10. 沢共同墓地遺跡
11. 沢城跡
12. 沢海岸北遺跡
13. 沢海岸遺跡
14. 廃明楽寺跡
15. 澗池遺跡
16. 窪田廃寺跡
17. 丸山古墳
18. 地藏堂廃寺跡
19. 積善寺城跡
20. 下新出遺跡
21. 河池遺跡

第1図 貝塚市遺跡分布図 (1 : 25,000)

・畠中遺跡地内で3箇所、澁池遺跡地内並びに窪田遺跡地内で各1箇所の計6箇所の調査地区である。各調査地区の詳細については次章で順次報告する。

第二章 調査概要

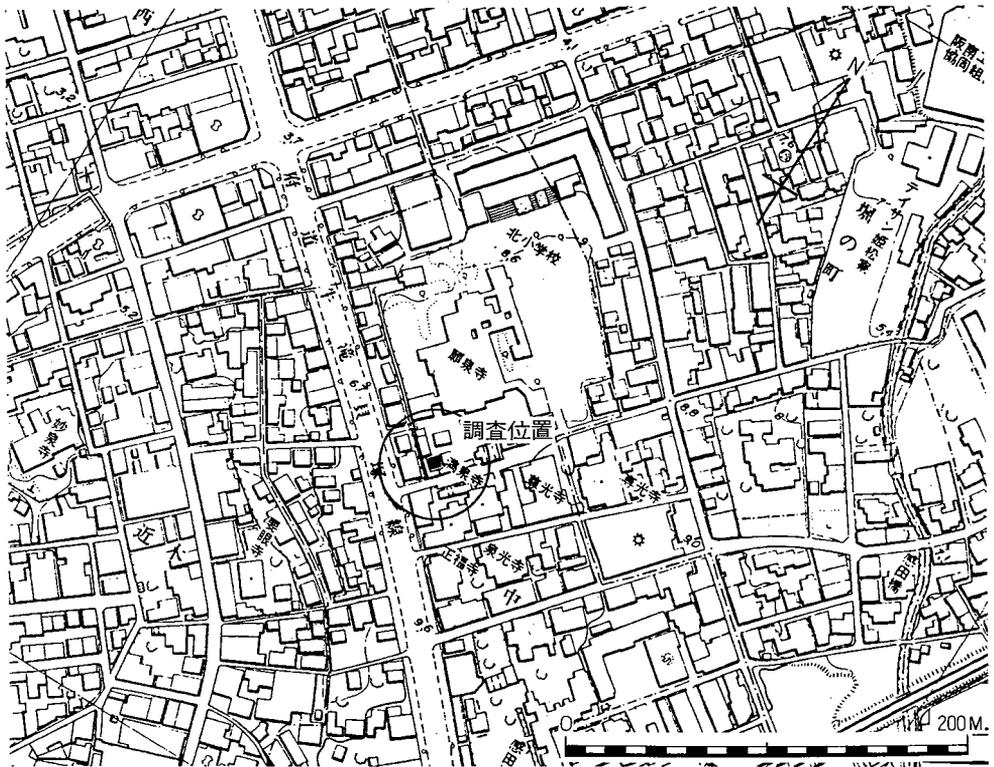
1. 貝塚寺内町遺跡の調査

はじめに

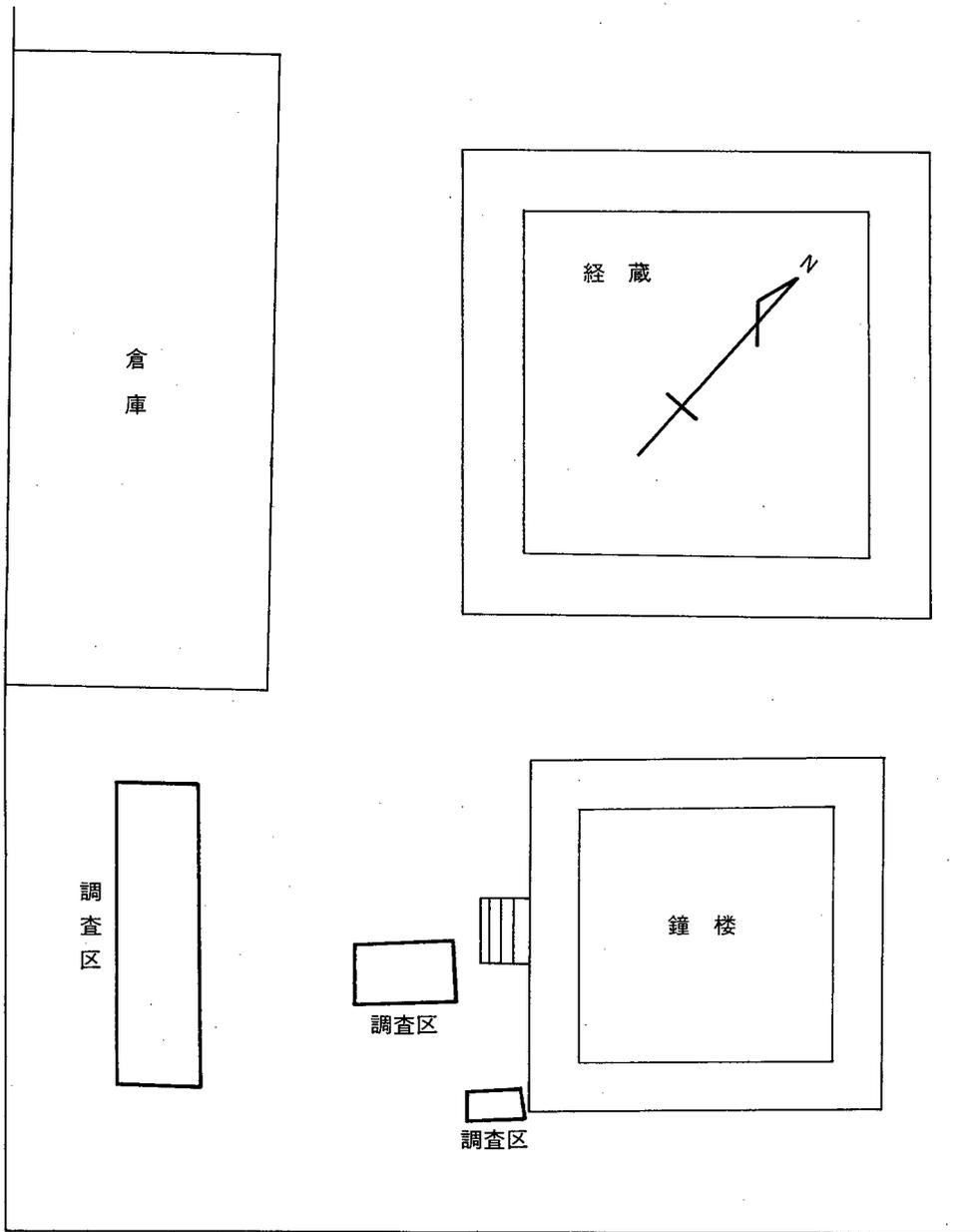
発掘調査を実施したのは、中世末期以来環豪城塞都市として成立した貝塚寺内町草創の地である願泉寺境内の一角にあたる地区である。

当地区は貝塚市中部より連なる洪積地が海岸部に突出する最突端部に位置しており、その台地縁辺部に現在の願泉寺が造営されている。

願泉寺はもと応仁年間に蓮如上人が紀泉化導のとき教えを説いた草庵を発祥とし、その後永らく無住となっていたが、天文14(1545)年に記州根来寺よりト半斎了珍を迎え草庵を再興したと伝えられる。また、同天文24(1555)年に寺内に取り建てられたものの天正5(1577)年には織田信長の軍勢に攻められ、兵火によって焼失した。同天正8(1580)年に新た



第2図 調査位置図



第3図 調査区域図

に八間四面の本堂を建立し、それまでの草葺屋根を板葺に替えこれを人々は板屋道場と呼んだといわれている。

天正11(1583)年に本願寺門跡顕如上人が紀州鷺の森から貝塚に移り、これより2年間余り貝塚御坊は本願寺御堂に充てられた。慶長3(1598)年に板葺の本堂を再建し、慶長12(1607)年には「願泉寺」の寺号を授けられ、さらに慶長15(1610)年二代了閑のときに徳川家康より寺内諸役免許の黒印を授けられた。以後、歴代の将軍家から同文の免許状を受けている。寛永13(1636)年のト半四代了周のときには東叡山寛永寺において剃髪得度し、後の慶安元(1648)年には「真教院」の院号を、寛文8(1668)年には「金涼山」の山号を授けられている。

現在の本堂は寛文3(1663)年に寺内町民をはじめ、近郷近在の門徒の寄進を受けて再建されたもので、梁間、桁行ともに十三間半四方向拝付きの大規模なものである。その他の建造物群もこの時期に相前後してほぼ建ち並んでいたと思われる。

以上のように、願泉寺の歴史的環境については種々の古文書等による古記録から若干ではあるがうかがい知ることができる。

今回、発掘調査を実施したのは現願泉寺境内の南端部にあたる地点である。

調査は幅約1.5 m、長さ約5.0 mのトレンチおよびその隣接地に小規模ながら土層確認用のグリッド2箇所を設定し実施していった。

遺 構

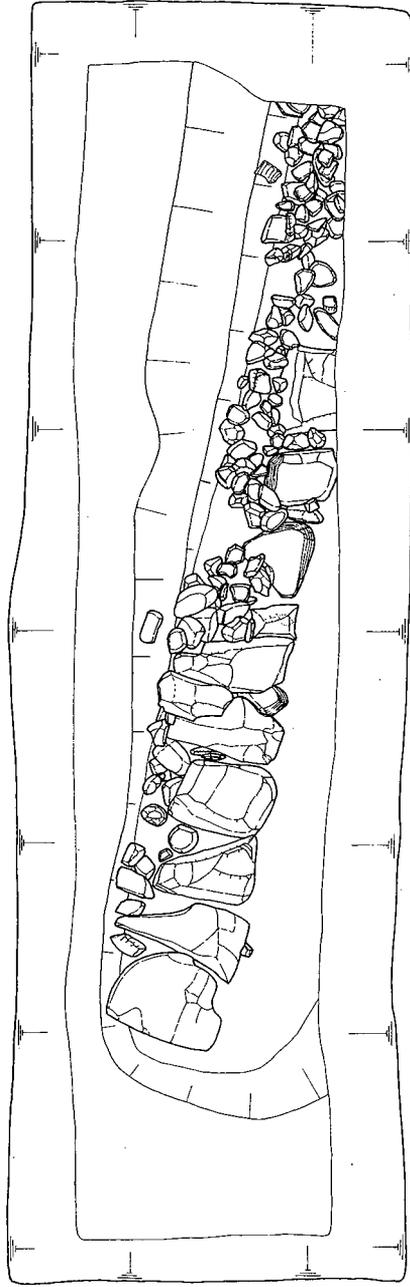
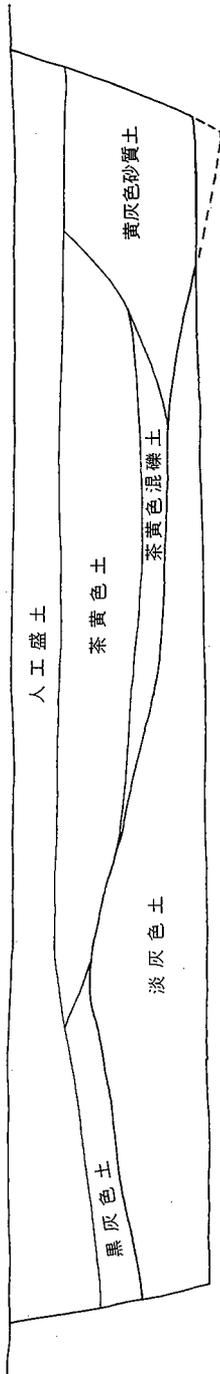
トレンチ内の基本土層としては現地表面より約0.3~0.6 mの人工攪乱盛土層が残存し、その下層で約0.1~0.15 mの茶黄色土あるいは淡黄色土層が認められる。以下、配石を施した施設上面の検出を見る。配石遺構は基底部のみの検出であるとともに調査面積の狭さからその性格については、不明確なものと云わざるを得ないものである。

検出遺構はN-33°-Wに軸線をもち調査区内においては一直線上に配される石列で、石列南西側では配石のため地山面を一段掘り窪めたうえ5~10 cm大の裏込め石を多量に配していた。また、一部ではあるが配石基底部より約70 cmほどの高さまで旧地山面が残存していた。配石遺構の北東面は一樣に配石に面をもち一直線状に伸びている。さらに、石列の状況から見て数段以上の石の重なりがあったものと考えられる。

石は径約25~50 cmほどの砂岩系の自然石で配され、一部は火を受けた状況となっており焼土も検出されている。調査区南東端では石列はとぎれ地山面が一段高く残存する。

遺構の性格としては今後検討を要するものの配石遺構の丁寧な造り方および南西側の地

L: 仮0



0 2M

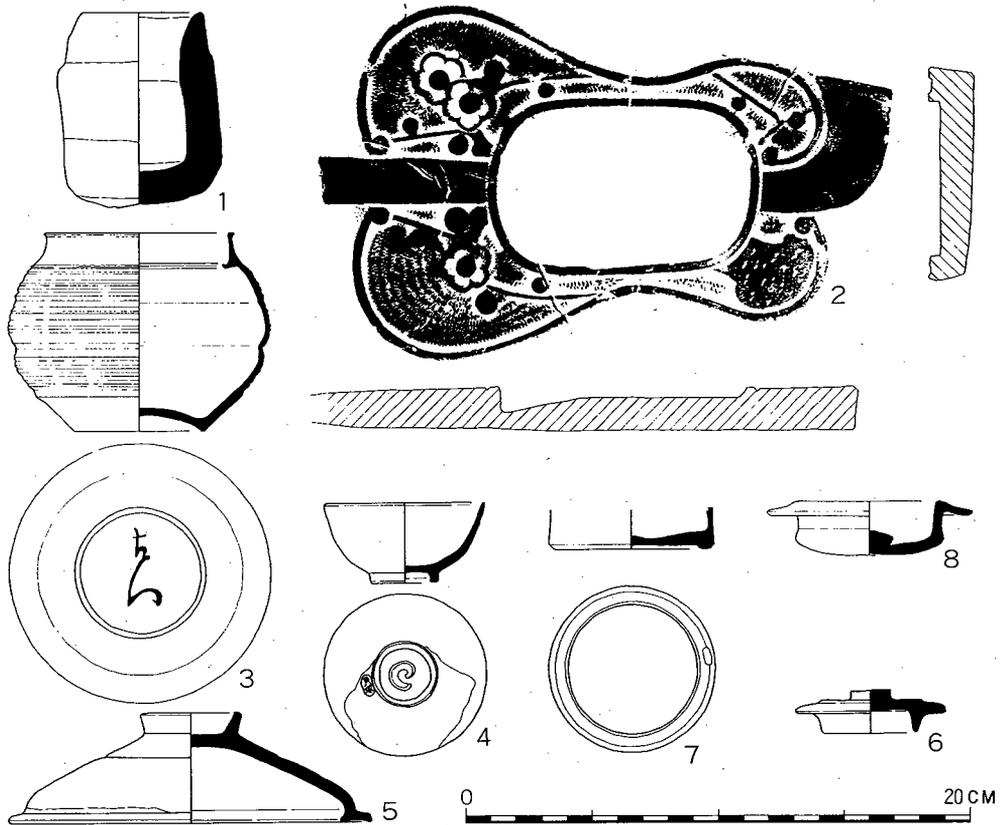
第4図 遺構実測図

山面の高まりなどから考え、石垣状遺構の可能性をもつものと考えられる。

遺物

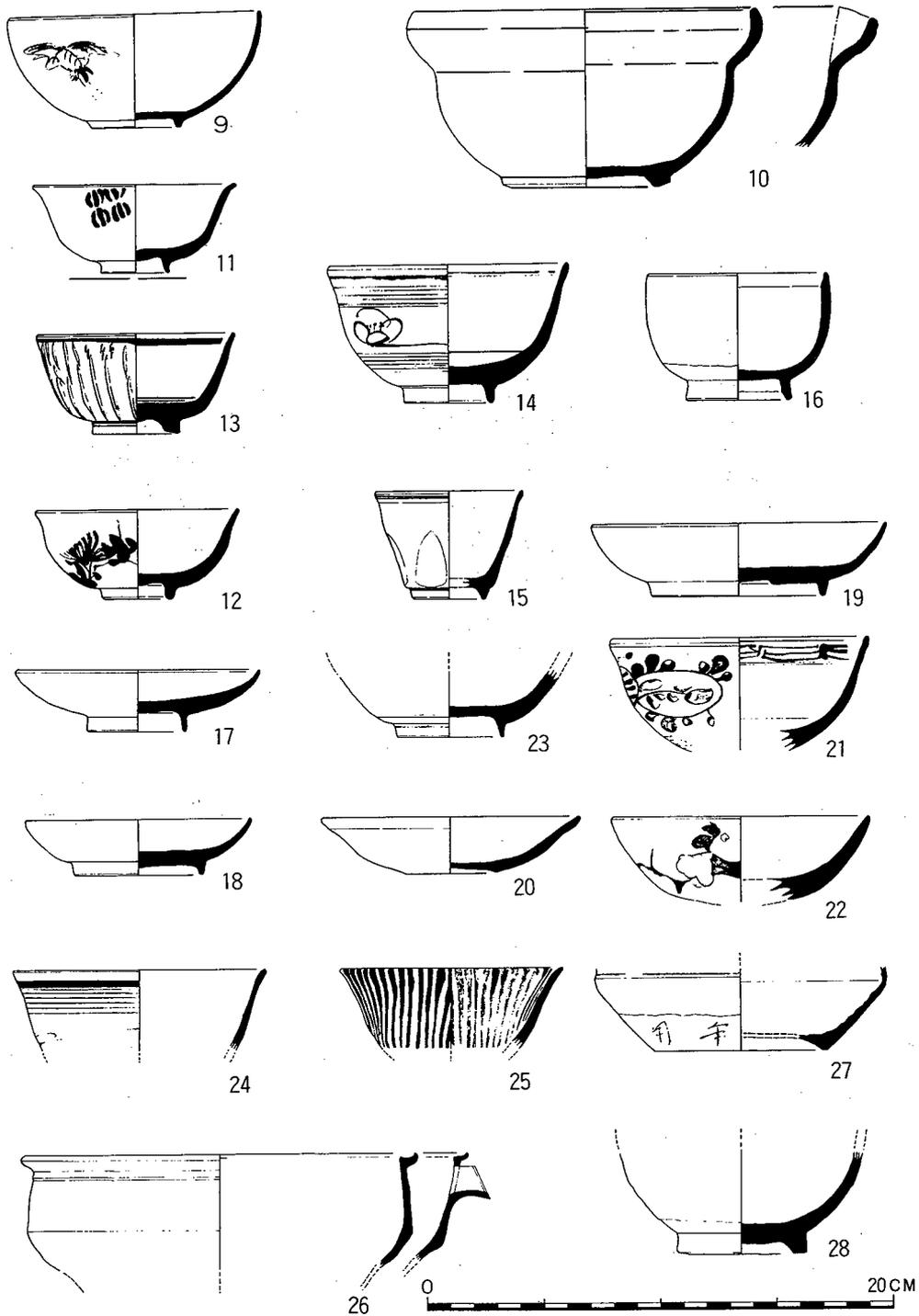
出土遺物としては多量の陶器類とともに瓦類を検出したが、そのほとんどが人工攪乱盛土内からの出土である。配石遺構に伴うと考えられる遺物は今回の調査では一点も検出されなかった。

出土遺物の多くは瓦片や染付を含む陶器類であり、その他若干の土師器、備前焼すり鉢片や石製硯、塩壺、白磁片等である。



第5図 出土遺物実測図

出土遺物の時期については大別して二時期に分かれるものと思われ、概ね18世紀代のものと19世紀後半ごろ、つまり幕末から明治にかけてのものと思われる。また、出土遺物中刻印を施す土器が2点出土している。1点は口径6.4 cm、器高3.2 cm、高台径2.7 cm、高台高0.4 cmと小形のおちょこ状の高台外面に施された刻印と、器形は不明であるが底部径6.6 cmを測る高台底面にやや不鮮明ではあるが施されたものがある。前者は長径0.9 cm



第6图 出土遺物実測図

短径0.5 cmの小判形の圏線内に「貝塚」と施されており、後者は長さ0.75cm、幅0.3 cmにわたって「錦光山」と施されている。

「貝塚」銘を有する土器の出土あるいは保有例については今のところ知られておらず、文献等からも「貝塚」銘を有する資料は筆者の検証不足ということもあると思われるが、現在のところ見だし得ていない。

「錦光山」銘を有する土器については、京都、栗田焼窯元鍵屋の山号として、小林徳右衛門系と安田源七系の二者があげられている。小林家初代徳右衛門は正保2(1645)年の創業と伝えられ、「錦光山」銘を有するのは三代小林喜兵衛のときである。今回出土した銘印土器については、六代宗兵衛のときには無粋、小判形あるいは長角の「錦光山」印を用いてたということから、五代喜兵衛、六代宗兵衛のころの作品かと思われ、江戸時代末期あるいは明治初年のものと考えられる。

おわりに

今回の調査で検出し得た配石遺構についてはその性格を確定するまでには至っていないが、調査区内の遺構検出状況から考えて石垣状遺構になるものと考えられる。ただ、出土遺物は遺構に伴うものは1点もなく、遺構の設営時期については遺物からの考察は不可能である。

遺構の検出状況から考えられることとして、現地表面より、つまり現本堂造営(再建)にかかる基礎部分から遺構基底部までの深さが約0.9~1.0mとかなり深く、また配石遺構の軸線が現在の各堂にくらべ方位を異にしていることから考えると、現本堂再建時よりも古い時期の施設と考えられる。さらに、貝塚寺内町の絵図としては現存する最古のもので現在願泉寺に所蔵されている慶安元(1648)年九月吉日の記載をもつ絵図にも当調査区付近に石垣状等の記載がないことから、それ以前の施設であるという可能性を充分にもっており、少なくとも江戸時代初期あるいはそれ以前の天正5(1577)年、織田信長の軍勢により焼失した施設にかかる遺構かとも考えられよう。

いずれにしろ、今回の調査成果としては現在の願泉寺再建期をさかのぼる遺構の存在。また、古絵図・古記録等によっても実証しきれないその歴史的欠落の時期を遺跡として再現できうる可能性を今後の調査に期待せしめたということは大きな成果であるといえる。

さらに、刻印銘を有する土器の出土を見たことは、江戸時代末期における京都との交流並びに在地における窯業の一参考資料を得たといえ、今後の陶器研究に大いに役立てるものと思われる。

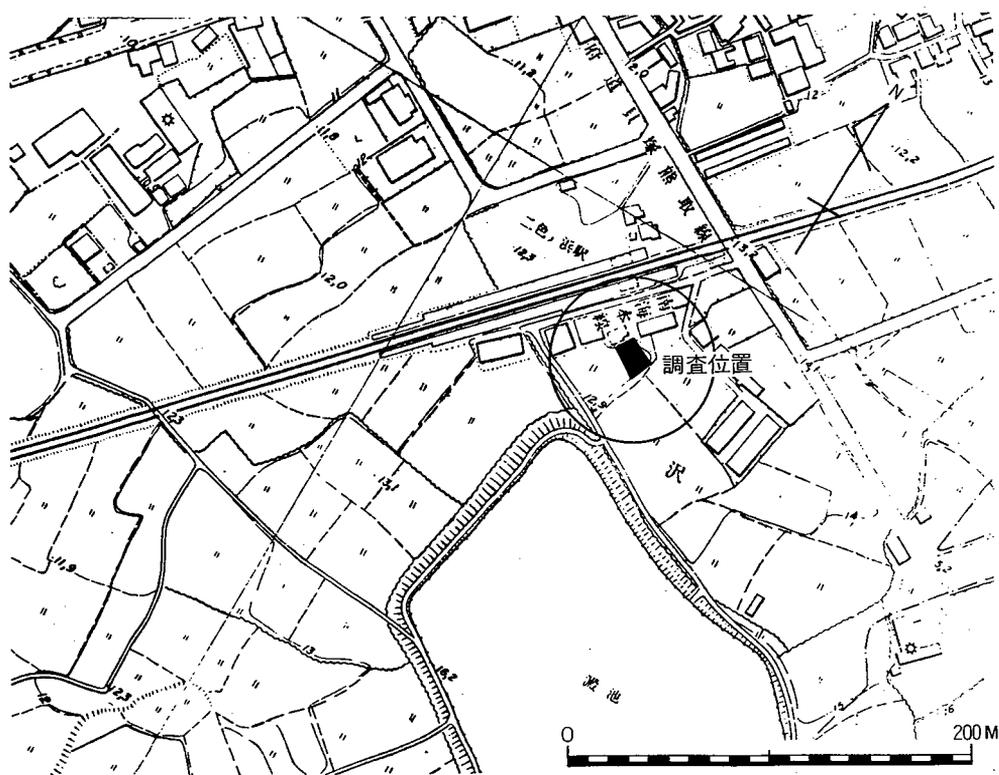
2. 澱池遺跡の調査

はじめに

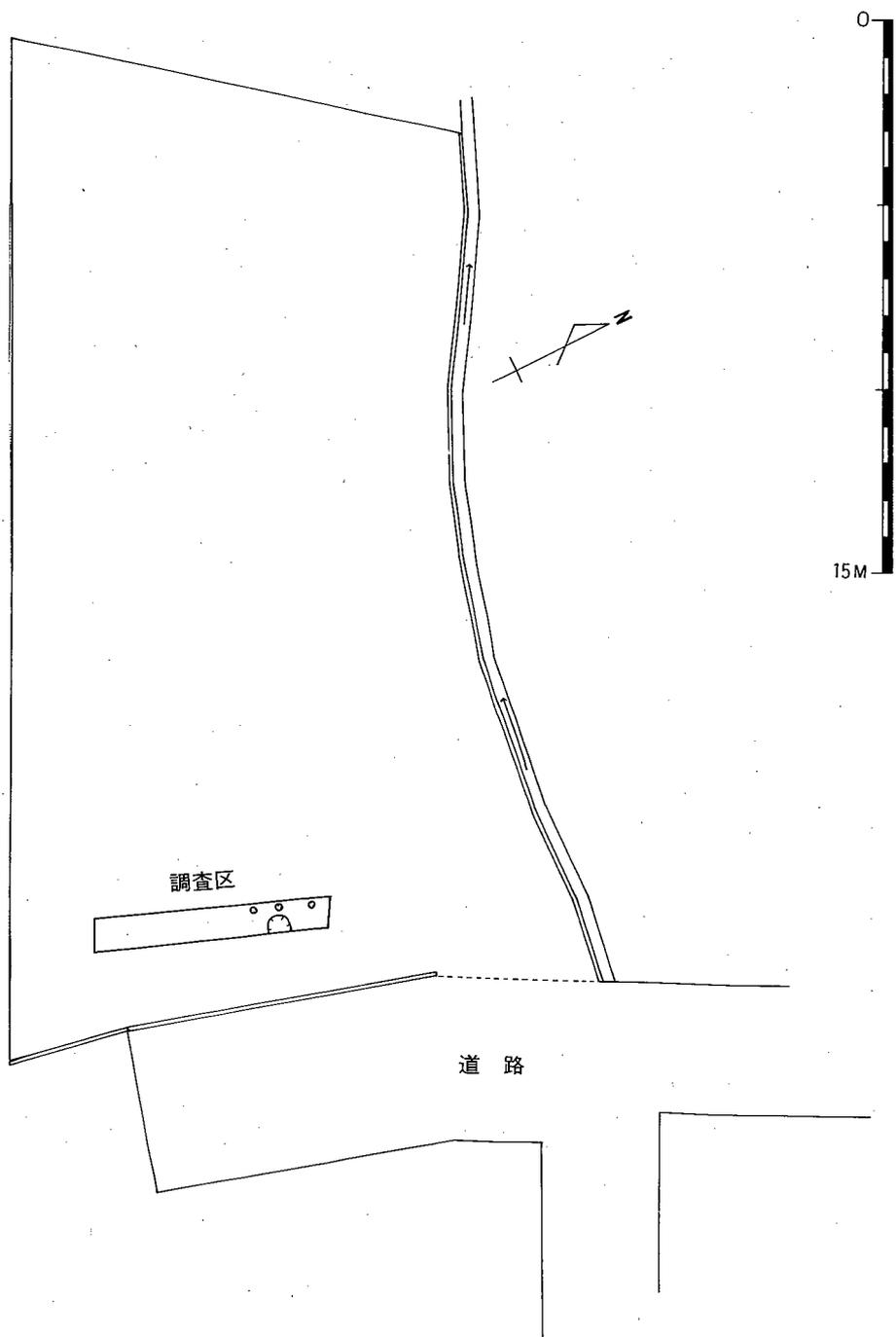
発掘調査を実施したのは南海本線二色ノ浜駅南東方向に位置する澱池を中心として二色ノ浜駅や、周辺耕作地をも含んだ澱池遺跡内のほぼ中央部にあたる地点である。

調査地は昨年度宅地開発等を目的として延べ面積約1100㎡にわたって発掘調査を実施した澱池北接地域のすぐ北西部に位置している。

当遺跡は昭和52年度刊行「大阪府遺跡地図」では奈良～室町時代にかけての遺物散布地としてマークされている地域であり、現在でも周辺耕作地からは鎌倉～室町時代にかけての土器片が表面採取できる状況である。昨年度に実施した発掘調査では鎌倉～室町時代を中心とした掘立柱建物跡や井戸、その他土壌、溝状遺構等が検出されており、遺物の出土量においてもかなりの量の出土を見た遺跡である。今回の調査はその昨年度の調査区にすぐ近接しての個人住宅建設に係るものである。



第7図 調査位置図



第8図 調査区および遺構平板測量図

遺 構

調査区の設定は住宅建設予定地内に幅約1.0m、長さ約6.5mのトレンチを南北方向に設け、遺構の有無の確認を目的として実施していった。

トレンチ内の基本土層としては約0.4mの第一層人工盛土下で約0.1~0.2mの第二層旧耕作土となり、以下約0.1~0.2mの厚みをもつ第三層淡茶褐色土層となり、黄灰色混礫地山面に達する。

検出遺構としては調査トレンチ北辺部において地山面より切り込む形で土壌状遺構1基および性格不明のピット3箇所を検出した。

土壌状遺構は径約0.7m、深さ約0.2mを測り得るものであり、ピットについては径約0.2m程度、深さ約0.05~0.1mを測りそれぞれが約0.5mおよび約0.7mの間隔をもって一直線上に並ぶ。性格等については柱穴列となるかはやや疑問であるとともに、時期についてもそれぞれの遺構内から遺物が検出されていないため不明としかいわざるを得ないのである。ただ、地山面上層淡茶褐色土層内からの出土遺物を見るかぎり、14世紀後半を下るものではないと思われる。

遺 物

今回の調査において出土した遺物としては全体量としても少量かつ小破片であり図示に耐えられるものとしては1点も検出し得ていない。

出土遺物の種類としては淡茶褐色土層内からではあるが瓦器碗片、土師器小皿片、瓦小片など、その他器種不明の土師器片、陶器片が出土したのみである。

おわりに

今回の調査の成果としては当初、昨年度調査区において多量の土器類とともに検出した掘立柱建物跡やその他井戸等の各種遺構群に近接しているところから、遺構の検出を見るものと期待を有していた。しかし、出土遺物および検出遺構についてはその性格を把握するには不明確なものであり、検出したピット列についても同様に柱穴とするには不明瞭なものである。

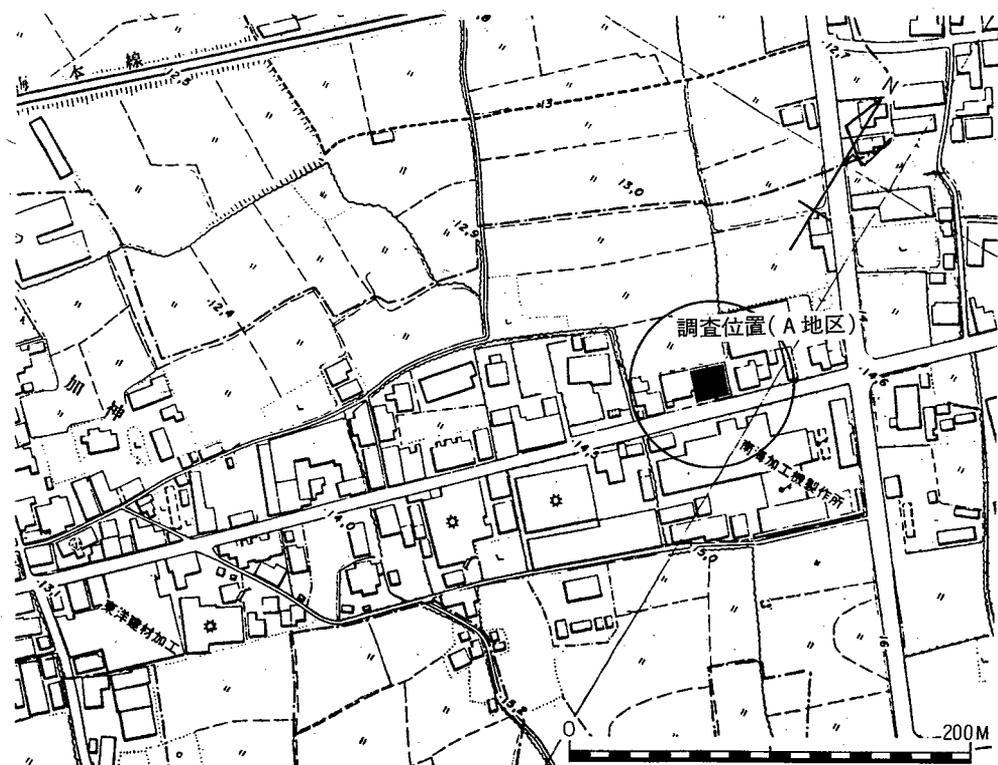
3. 加治・神前・畠中遺跡の調査

はじめに

本年度の調査として加治・神前・畠中遺跡地内における発掘調査件数は3地点である。いずれも個人住宅建設に伴う事前発掘調査であり、遺構確認調査を主体としたトレンチ発掘調査である。

加治・神前・畠中遺跡は貝塚市街地南方に広がる遺跡として「大阪府遺跡地図」の中では弥生時代～室町時代にかけての遺物散布地としてマークされている遺跡である。昭和56年度において当遺跡地のほぼ中央部を第二阪和国道より海岸部に向かって伸び、国道26号線に取り着く府道貝塚中央線建設に先立ち実施された大阪府教育委員会による発掘調査では、古墳時代～鎌倉・室町時代に至る集落跡的な遺構が確認されている。さらには、弥生時代の遺物も同時に出土しており、周辺地域の発掘調査いかんによっては古代人の生活・文化層を把握でき得る遺跡である。

このように、本市にとって古代人の生活層を把握でき得る遺跡としては重要なものであるが、近年における開発の進行状況は十分な調査を実施していくのにあまりにも速く、や



第9図 調査位置図(A地区)

やもすれば遺跡の性格を把握できないまま消え去ろうとしている。

このような中、本市は上記したように小規模ではあるものの遺跡の性格の一端を把握すべく遺構確認調査的なものではあるが、個人住宅建設計画を切っ掛けに3地点の調査を実施した。

調査地区は報告の都合上、A・B・C地区と以下呼称する。なお、C地区寄りではあるが、BおよびC地区のほぼ中央部を府道貝塚中央線が通過している。

A地区の調査

A地区については遺構および土層確認調査として、住宅建設予定地内に幅1.3m、長さ約8.0mのトレンチを1箇所設定し発掘調査を実施していった。

調査トレンチの基本土層としては現地表面より約0.45mの第一層人工盛土、約0.1mの第二層旧耕作土層、約0.1~0.15mの第三層青色砂質土および約0.3mの第四層淡青黄土となる。第四層淡青黄色土を除去したのち、黄色地山面に切り込む形で溝状遺構の検出を見た。溝状遺構はトレンチに直行する形で幅約0.35m、深さ約0.15mを測る。溝内埋土は灰色砂質土一層であった。検出遺構の性格としては不明確であるが、農業用水路的な施設ではないかと思われる。

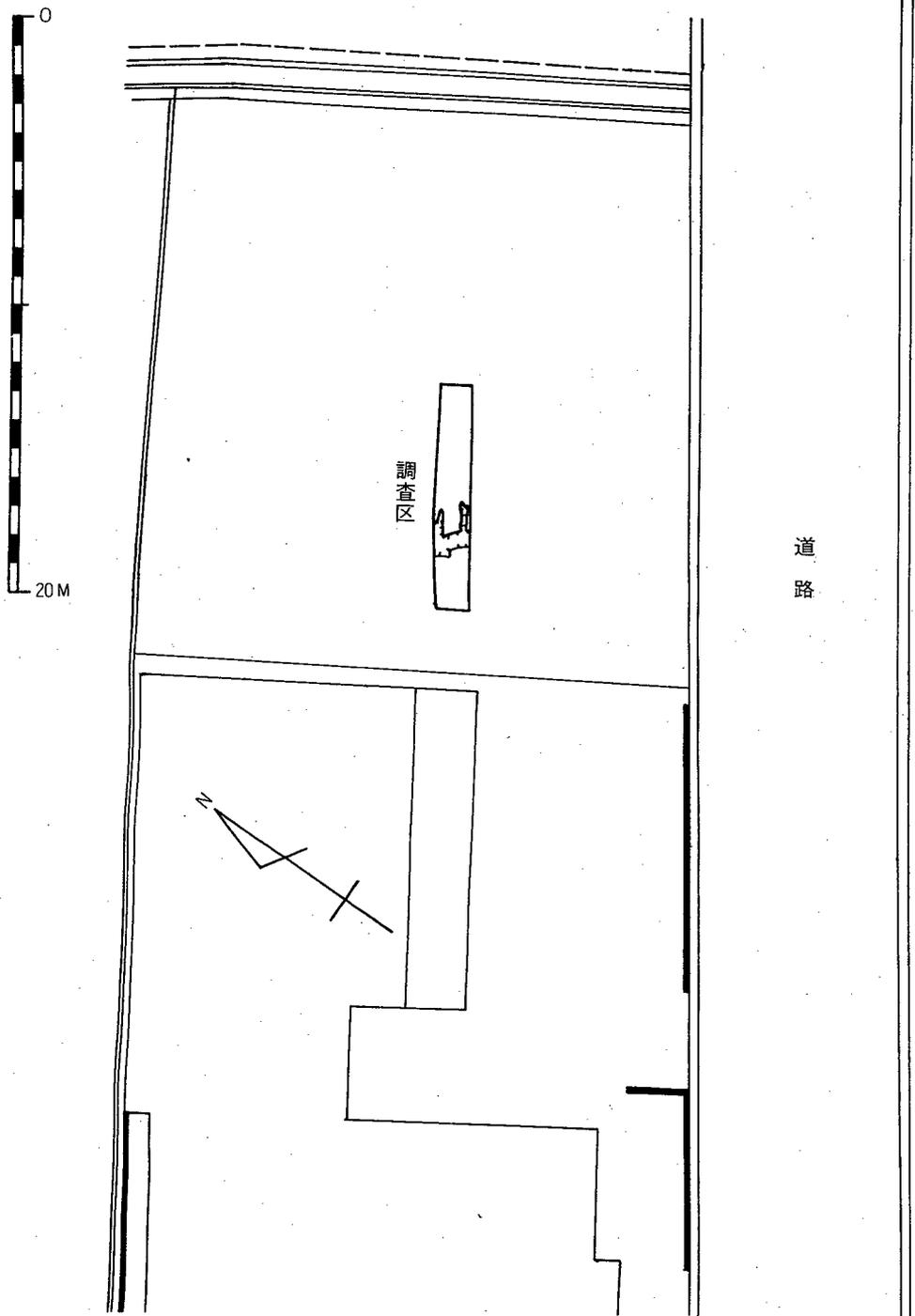
今回の調査では出土遺物がほとんど無く、遺構内より土師器小皿および瓦器碗かと思われる小破片を極微量検出したのみであるとともに図示に耐えられるものではなかった。

B地区の調査

B地区については住宅建設予定地内に幅約1.2m、長さ約7.0mの第1トレンチ。幅約1.5m、長さ約7.5mの第2トレンチおよびそのすぐ南側に延長する形で幅約3.0m、長さ約13mの第3トレンチを設けて発掘調査を実施していった。

調査トレンチの基本土層としては、第2トレンチおよび第3トレンチがほぼ同様の堆積状況であり、現地表面より約0.2~0.3mの第一層人工盛土、約0.1~0.2mの第二層旧耕作土および約0.05~0.1mの第三層淡茶褐色土となる。第三層淡茶褐色土の下層で茶黄色土となり遺構の検出を見た。第1トレンチでは若干異なり第二層旧耕作土下で約0.3mの厚みで淡茶灰色および黄褐色混礫砂質土となり、以下礫土層となる。遺構等については検出されなかった。第2トレンチおよび第3トレンチ内で検出した遺構は溝2条、土壙状を呈する遺構を3箇所検出している。

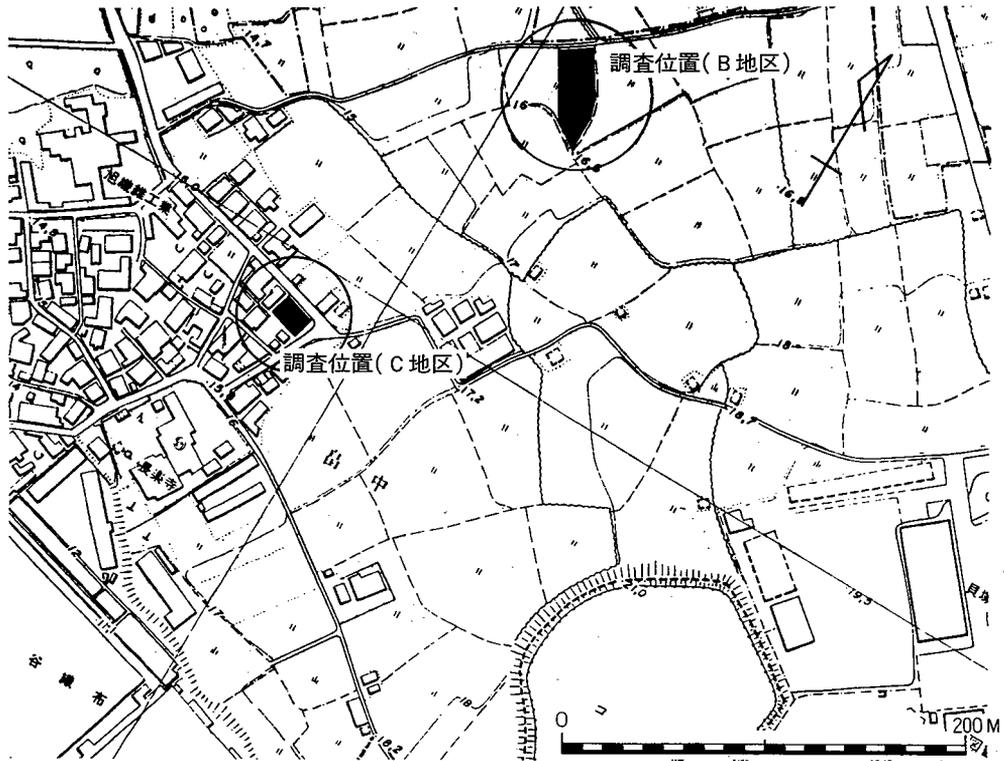
溝1は第2トレンチより第3トレンチにやや屈曲しながらではあるが延びる溝で、一部痕跡程度となる部分もある。黒色土を埋土とし幅約0.4~0.7m、検出面よりの深さ約0.05



第10図 調査区域および遺構測量図(A地区)

～0.1mを測り、第2トレンチ部のほぼ中央ではさらに一段の窪みを有し、遺構検出面からの深さは約0.3mを測り得た。

溝2は第3トレンチ内で溝1のすぐ西側で検出した遺構である。暗茶色土を埋土とし、規模は調査区壁面に延びていくことからやや不正確ではあるが幅0.5m程度、深さ約0.2mを測りやや湾曲ぎみに走る。

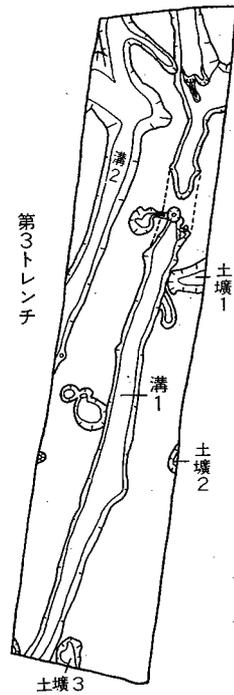
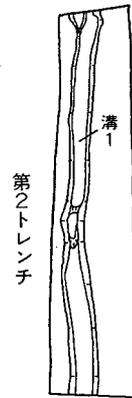
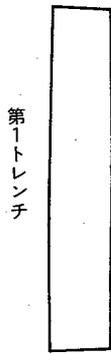


第11図 調査位置図(B・C地区)

土塊状遺構を3箇所確認しているが形は不揃いである。径については壁面へそれぞれの遺構が延びていくため不明確である。深さは約0.1～0.2m程度を測り得た。検出遺構の性格・時期等については出土遺物もないことからまったく不明である。

溝状遺構の性格および時期については、それぞれの溝内からの出土遺物がほとんど希薄であるため不明瞭といわざるを得ないものである。

全体的な出土遺物としても第三層淡茶褐色土層内において古墳時代と考えられる須恵器小片および、時期不明の土師器片を少量検出したのみで、図示に耐えられるものではなかった。



第12図 遺構実測図(B地区)

C地区の調査

C地区は前述したB地区の南西方向約180 mほどの地点で、個人住宅建設に伴う調査である。調査は遺構および土層確認調査として幅約1.0 m、長さ約6.0 mのトレンチを1箇所設定し実施していった。

トレンチ内基本土層としては現地表面より約0.1～0.15mの第一層耕作土、約0.15mの第二層灰黄色土となる。第二層灰黄色土を除去した後、第三層茶黒色土層面において遺構の検出を見た。第三層茶黒色土は約0.1～0.15mの厚みで堆積しているがその下層で黄色粘質土の地山面に達する。

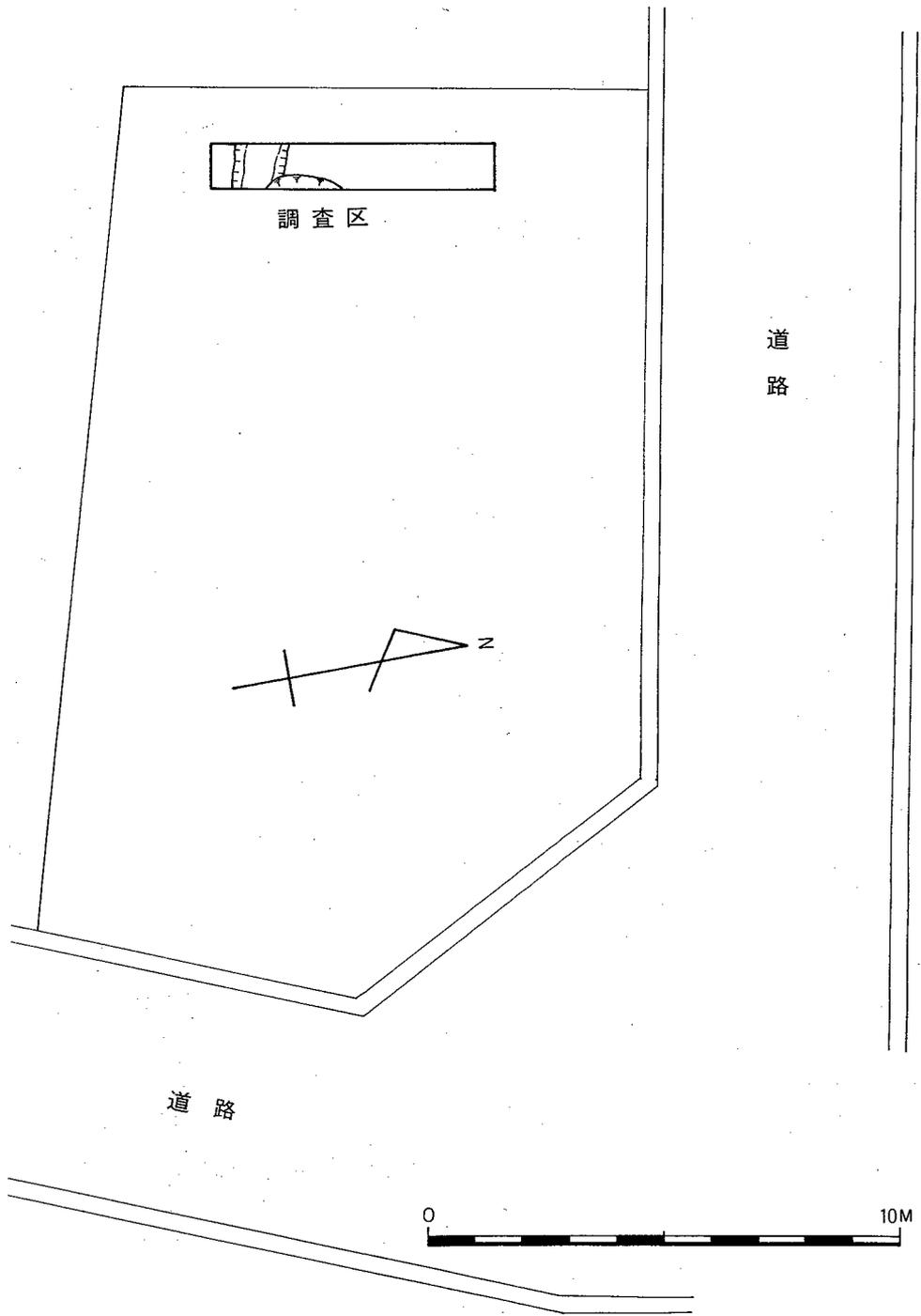
検出遺構としては調査区の幅が狭いこともあるが溝状遺構または土壇状遺構となるものを調査区南端において1箇所検出した。検出遺構の規模としては幅約1.15mを測り、深さは遺構検出面より約0.25mを測り得た。遺構内埋土堆積状況としては灰褐色土一層のみの堆積で多量の土器片を包含していた。時期としては出土遺物より江戸時代後半ごろのものかと考えられる。

出土遺物としては検出遺構面上層の第二層灰黄色土より土師器、染付片を検出するとともに遺構内からは多量の瓦片とともに土師器、陶器および染付片を検出した。

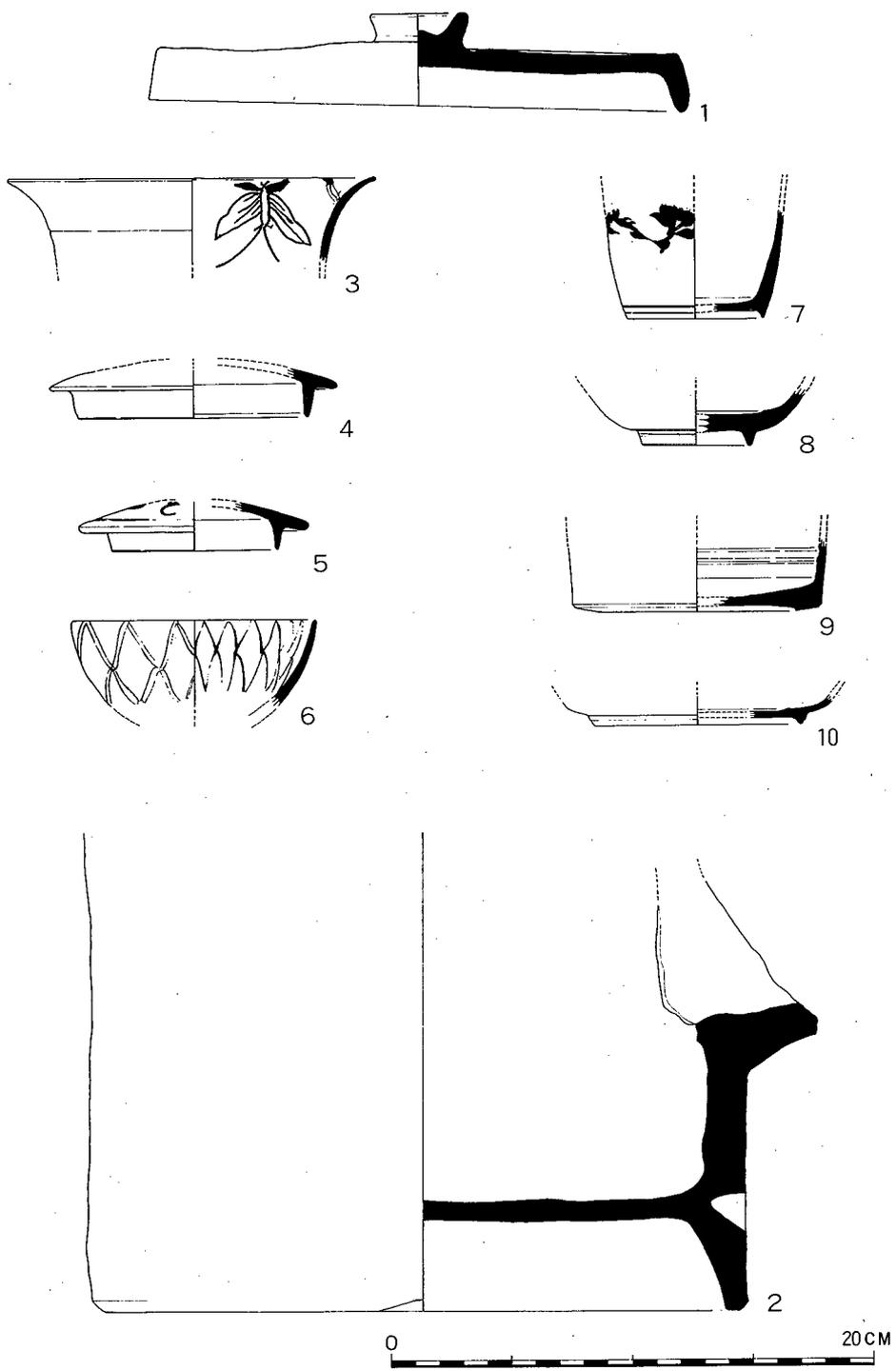
おわりに

本年度実施した加治・神前・畠中遺跡内におけるA・B・Cの3地区の発掘調査成果については前述のとおりである。

3地区はそれぞれ本遺跡地内の中央部に近い地域での調査区であり、また昭和56年度において大阪府教育委員会が発掘調査を実施した府道貝塚中央線建設地内にも近接していたが、検出された遺構としてはB地区において古墳時代かと考えられる溝状遺構等およびC地区については調査面積の狭さから明確には把握できなかったものの、溝状遺構あるいは土壇状遺構となる近世の落ち込み状遺構を検出したにとどまった。ただ、それぞれの検出遺構のベースとなっている地層は府道貝塚中央線内の調査で検出している弥生時代遺物包含土層であることもあわせて今回の調査で確認し得ており、弥生時代の遺構・遺物は検出されなかったものの、本遺跡の弥生時代の広がりがかかなりの範囲にわたることを確認できた。



第13図 調査区域および遺構平板測量図(C地区)

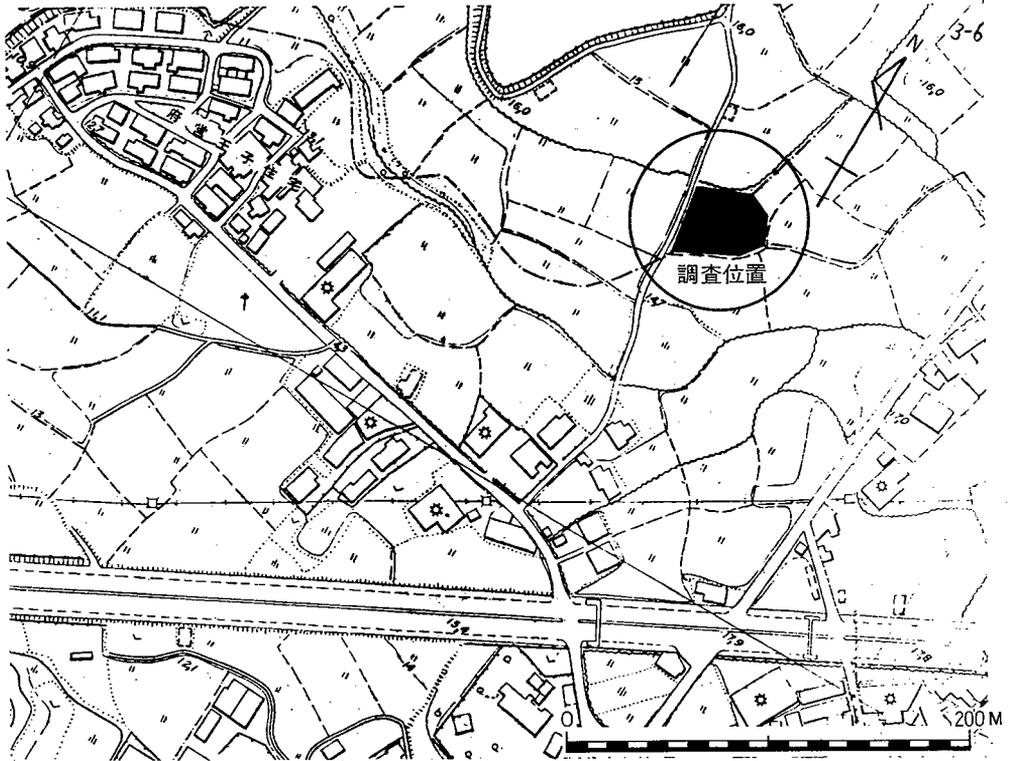


第14图 C地区出土遺物実測図

4. 窪田遺跡の調査

はじめに

今回、発掘調査を実施したのは南海本線二色ノ浜駅南東方向に位置する澁池を中心として広がる澁池遺跡のすぐ側に広がる弥生時代～鎌倉・室町時代にかけての遺物散布地である、窪田遺跡内の中央部付近にあたる地区である。調査地は澁池の南東側約100mで、海拔約16m前後を測る地域の個人住宅および分譲住宅建設に係るものである。



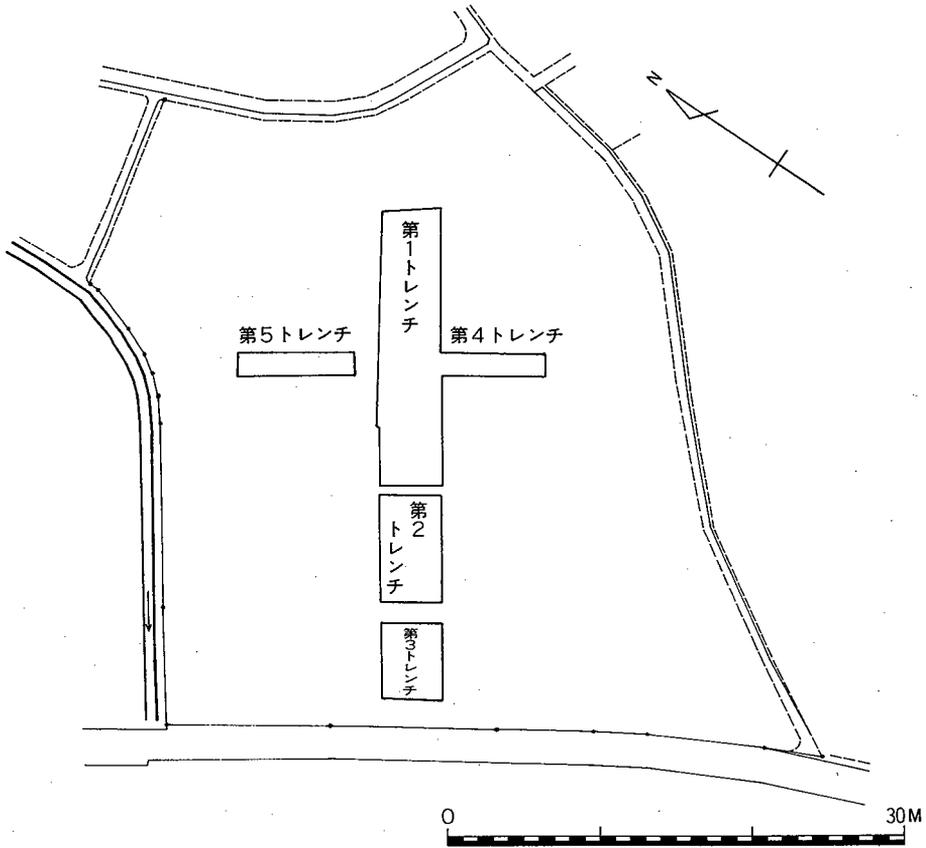
第15図 調査位置図

遺 構

調査区の設定は住宅建設予定地内に主軸トレンチとして幅約4.0m、長さ約32mのトレンチを北東方向より南西方向に一条設定したが、調査区の現状から第1トレンチ、第2トレンチおよび第3トレンチの3トレンチに分けて設置した。また、この主軸トレンチに直行するものとして幅約1.5m、長さ約7.0mの第4トレンチおよび幅約1.5m、長さ約7.5mの第5トレンチをあわせて設定し、発掘調査を実施していった。

トレンチ内の基本土層としては約0.5mの第一層耕作土下で、約0.15～0.25mの第二層

黄灰色土となり、以下明黄色地山面に達する。検出遺構のすべてはこの明黄色地山面に切り込む形で検出したものである。検出遺構としては溝状遺構、円形あるいは方形に近い土坑状遺構やピット状遺構および性格不明の落ち込み状遺構等をほぼ調査区全域で確認した。以下、検出遺構の中でその主要なものについての概略を示すことにする。



第16図 調査区域図

溝 1

第1トレンチ側壁に沿って直進する遺構である。幅約0.7~1.3m、確認全長約14mを測り、深さは約0.5m程度を有するが、ほぼ中央部では深さは約0.1m程度と浅くなっている。遺構北側では壁面内に屈曲する可能性もあるが、現状としては不明確である。遺構内埋土は茶褐色粘質土層が堆積しており、中から小破片となった瓦器小皿・碗片、土師器片、陶器片、青磁片等が多量に検出されたが、復元を可能にするものはなかった。

溝 2

第5トレンチ内で検出した南北方向に走る遺構である。遺構の残存状況としては痕跡程度のものであり、そのほとんどが削平されていた。検出した溝の規模としては幅約1.0m、現存の深さは最深部で検出面より約0.15mを測り得た。

遺構内埋土については灰色砂質土および黄色粘質土（明黄色地山土とほとんど同様の土質である）の混ざりあったような堆積土である。なお、この溝内からは遺物の出土は見られなかった。

土壙1

第1トレンチ内、溝1の東側において検出した遺構である。遺構の全要は確認できなかったが、一辺約2.3mおよび約3.5mの長形状を呈するもので、深さは遺構検出面より約0.9mを測り得た。遺構内埋土としては茶褐色粘質土層の堆積であり、溝1内埋土とほぼ同種である。出土遺物としても溝1内遺物出土状況と同様に瓦器小皿・碗片、土師器小片および青磁の小破片等が出土している。

土壙2

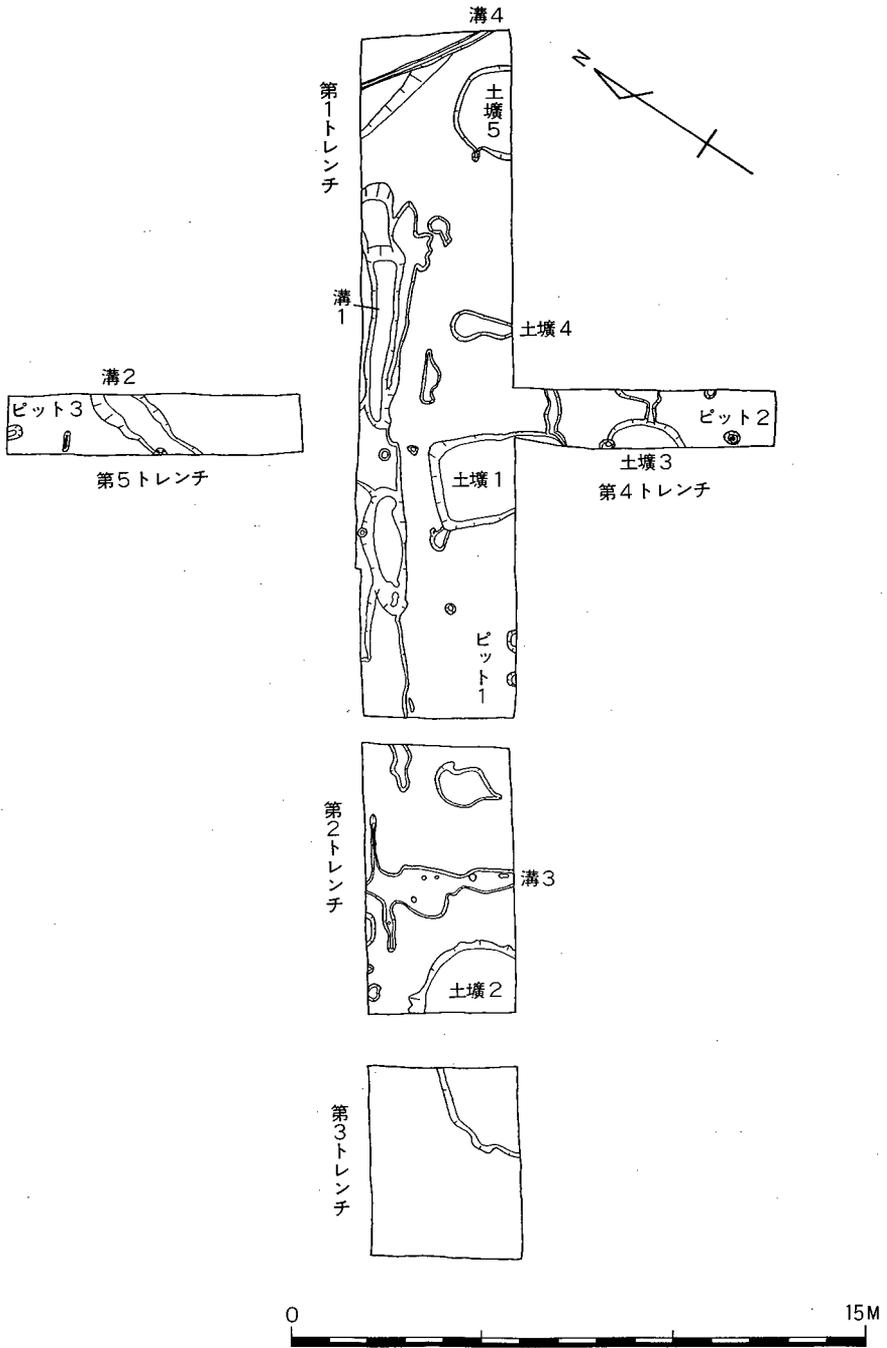
第2トレンチおよび第3トレンチ内にかけて検出した円形を呈すると考えられる遺構である。遺構の全要は検出し得ていないが、ほぼ円形を呈するものとすれば径約0.5mを測り得る。深さは約0.1m程度と浅いものである。遺構内埋土についても土壙1、溝1と同様であるが、遺物の出土量としてはやや少なく瓦器片、土師器片および青磁片を極微量検出したのみである。

その他の検出遺構としては溝1、土壙1・2と同様の遺構内堆積土を有するものとしてピット状遺構を3箇所検出している。第1トレンチ南端のピット1、第4トレンチ東側のピット2および第5トレンチ西端のピット3である。ピット1およびピット2についてはそれぞれ壁面内に延びていくために規模は明確でないが、円形あるいは楕円形を呈するものかと考えられる。それぞれの規模については径約0.4～0.5m、深さ約0.15～0.2m程度である。ただ、ピット2については柱穴となる可能性もあるが、それ以外のものについては柱穴はなりにくいものと考えられる。

これらの性格等についてはそれぞれが並びを有するものでもなく不明確としかいわざるを得ないものであるとともに出土遺物についても極微量の瓦器片および土師器小片を検出したのみである。

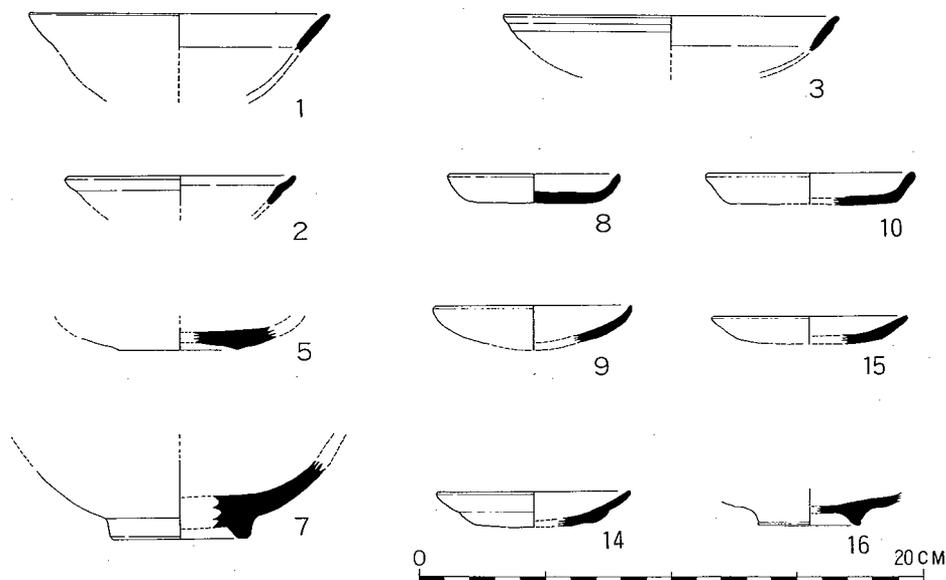
遺物

出土遺物としては第一層耕作土および第二層黄灰色土層からも多量の土器類が出土して



第17図 遺構実測図

おり、さらに各遺構内からもそれぞれ出土している。ただ、出土量としては豊富であるものの、そのすべてが小破片となつての出土であり、復元および図示に耐え得るものとしてはまったくといってよいほど検出されなかつた。



第18図 出土遺物実測図

出土遺物の種類としては瓦器小皿・碗片、土師器小皿片、陶器片および青磁小皿・碗片等である。なお、第二層黄灰色土層からの出土ではあるが宋銭残欠1点が出土している。宋銭はかなり腐食しているものの「天聖□宝」と刻まれており、初鑄を西暦1023年とする「天聖元宝」あるいは「天聖通宝」であろう。

その他溝1、土壙1・2、ピット1・2・3内から出土した遺物については瓦器片の形態から概ね13世紀代後半から14世紀代のもと考えられる。ただ、図示した瓦器碗底部高台についてはそれよりも若干先行するものかと思われる。

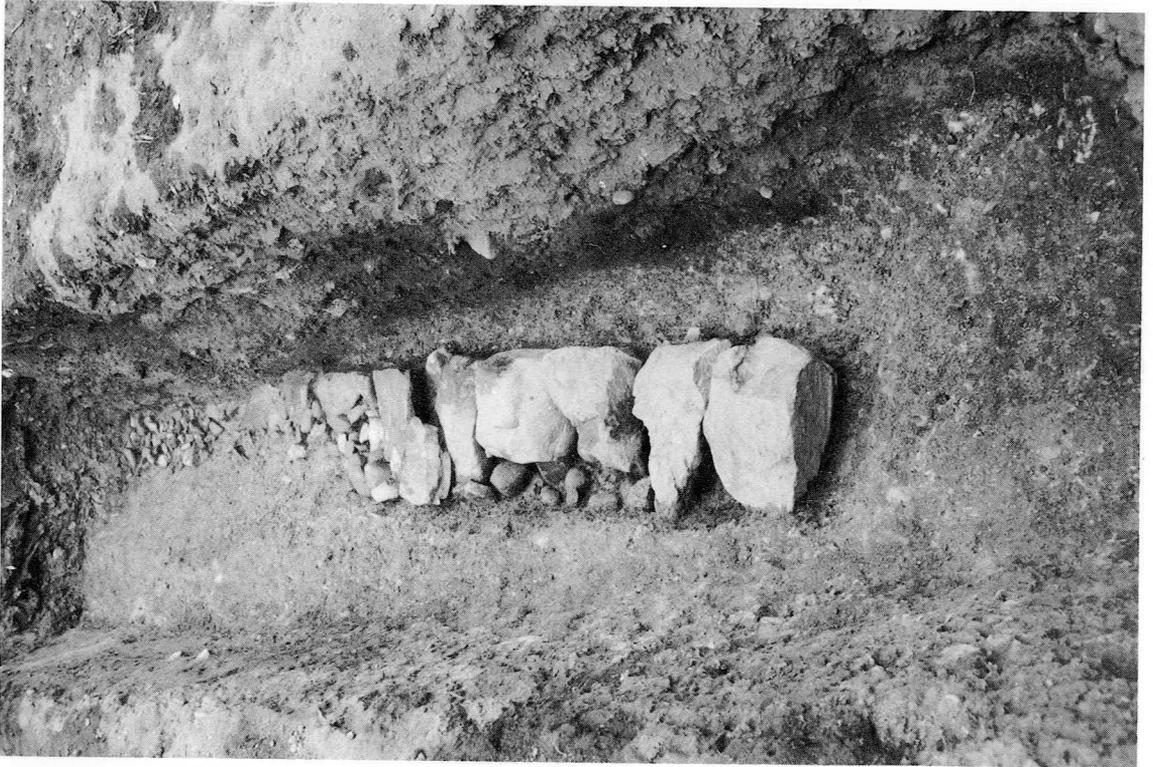
おわりに

今回の調査で検出した遺構群については当初よりトレンチ調査を主体としていたため遺構の広がりおよび範囲等については十分な調査を行えなかつたとともに、それら遺構のもつ性格等についても不明瞭なものであった。しかしながら、出土遺物については小破片となつての出土ではあるがかなりの量にのぼり、また銭貨を検出したことなどから、13世紀から14世紀代にかけての当時の人々の生活場所の一部ではないか考えられる。

今回調査した窪田遺跡あるいは近接する澱池遺跡周辺については、今後貝塚市の中においてもより一層の開発が進行するものと予想される地域であるため、こういった発掘調査の結果資料を積み重ねることによって当地域内における歴史的な位置づけが可能になっていくものと思われる。

圖

版



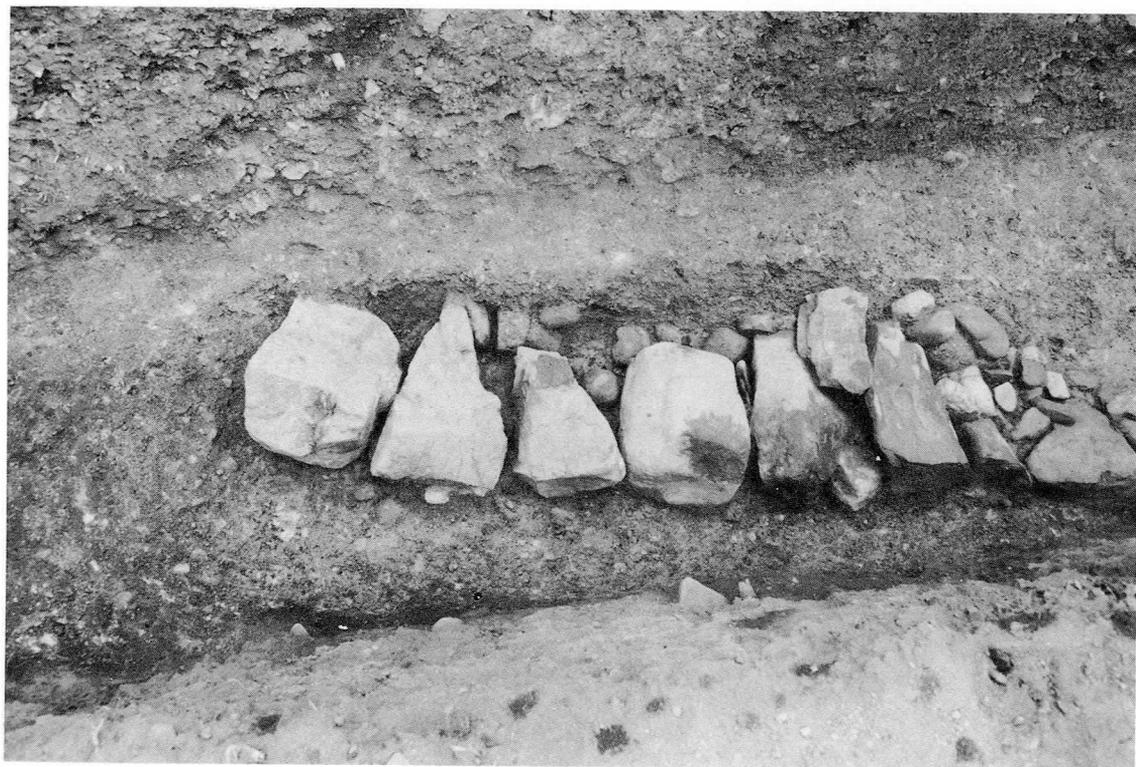
(1) 調査区全景

南東より



(2) 同 上

北西より



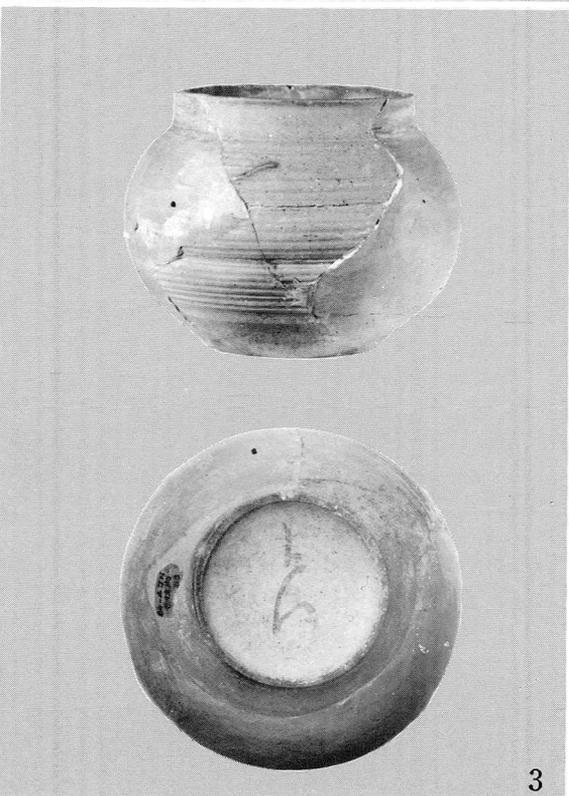
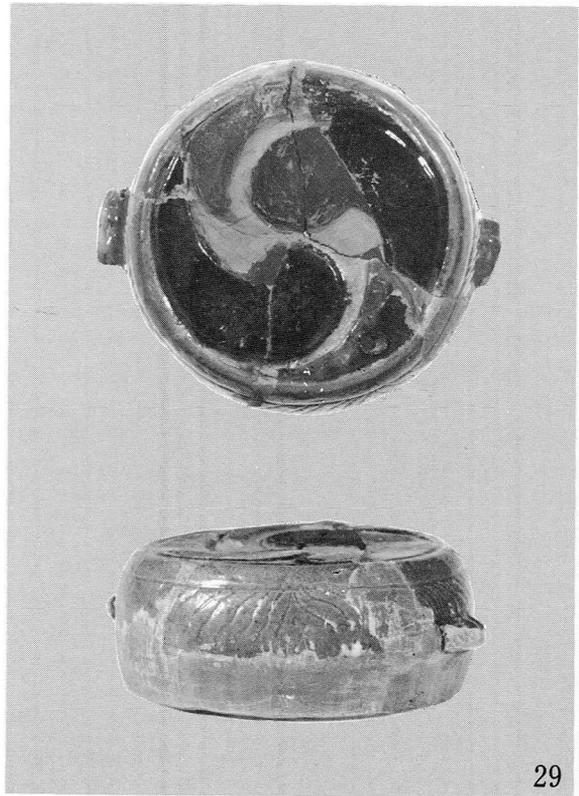
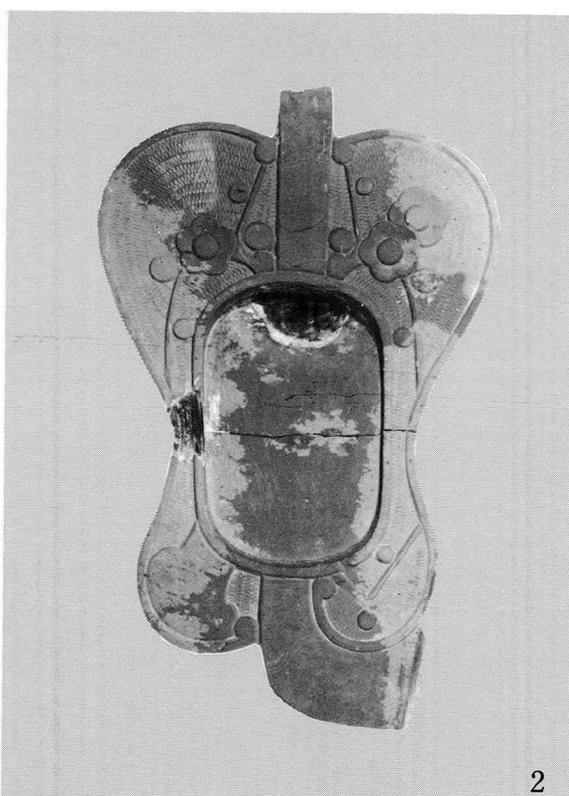
(1) 検出遺構部分

上より

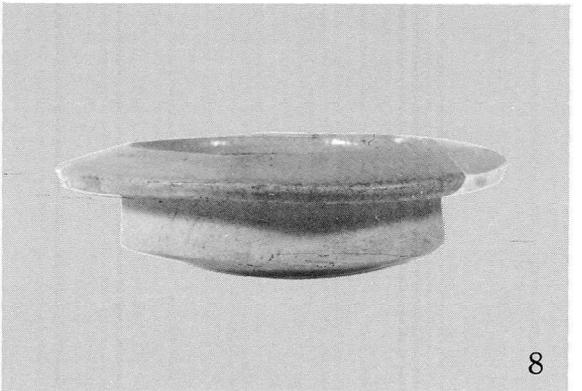
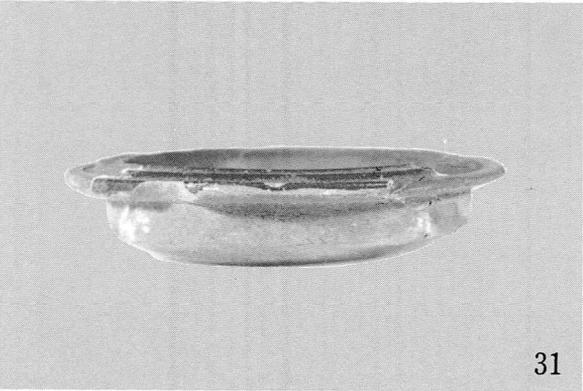
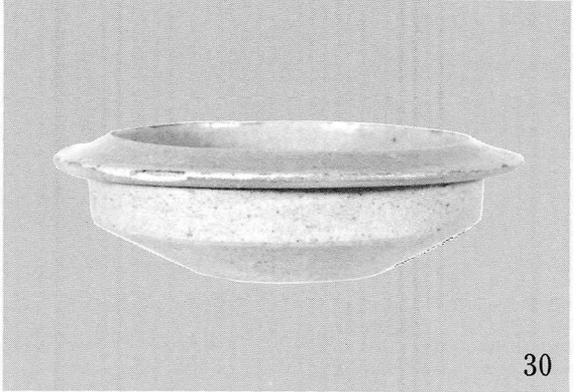
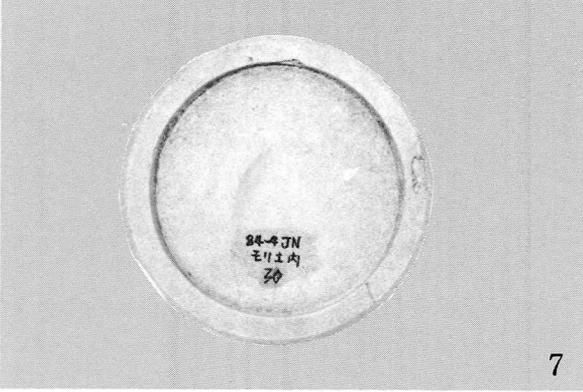
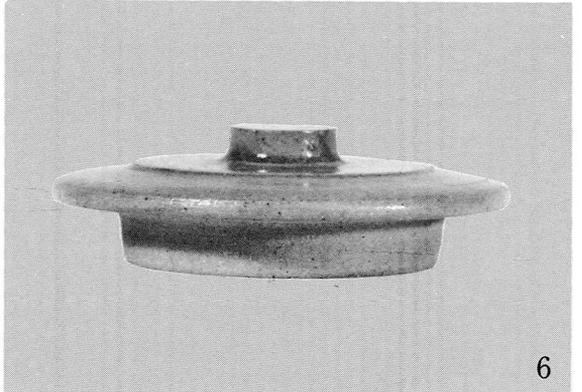
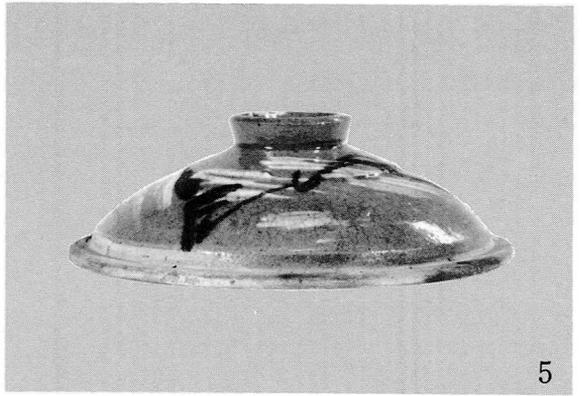
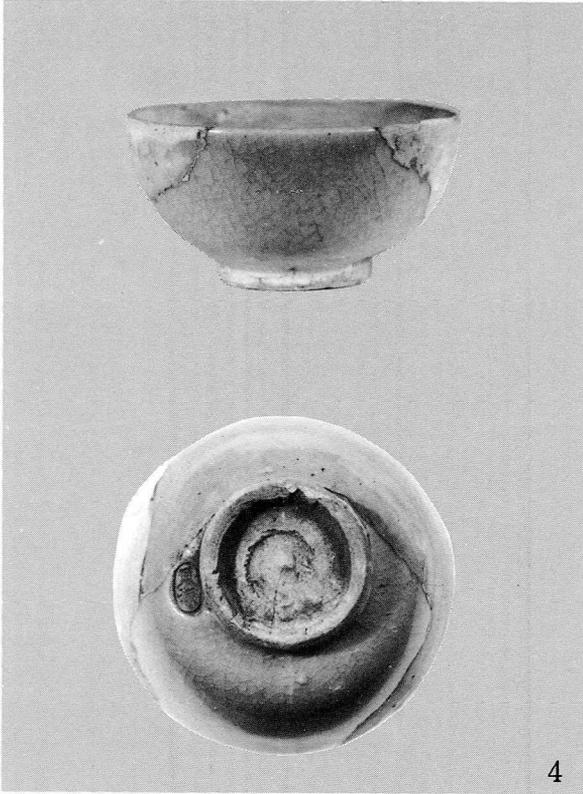


(2) 検出遺構部分

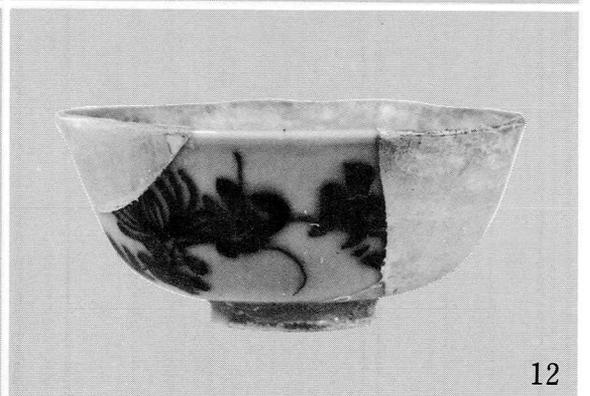
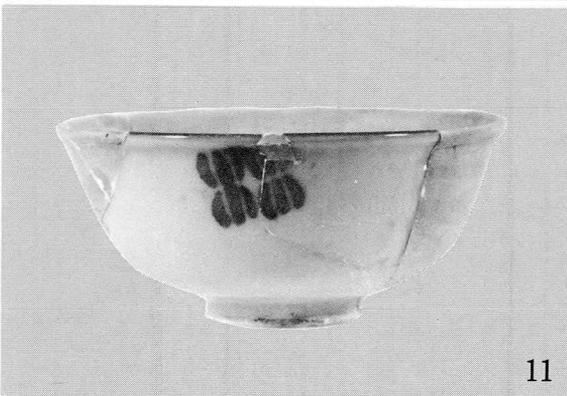
下より



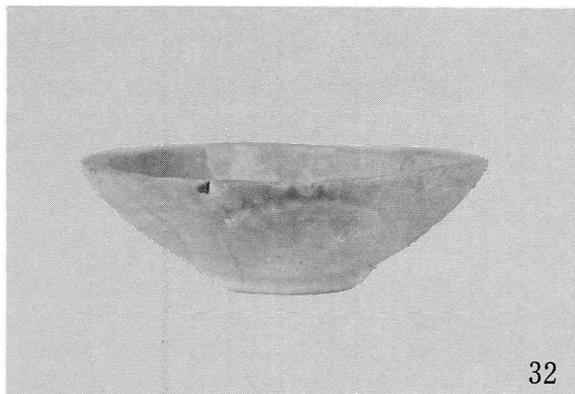
土師器塩壺(1)、硯(2)、陶磁器(3・29)



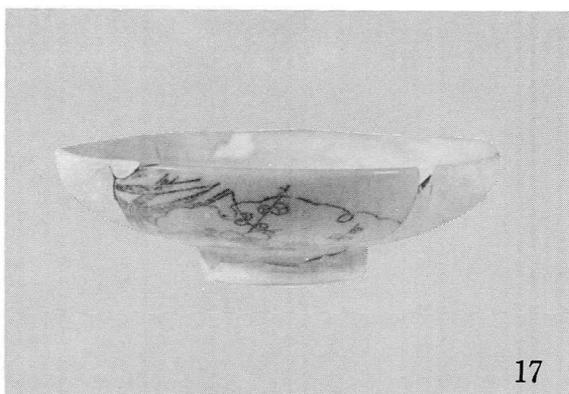
陶磁器 (4 ~ 8 · 30 · 31)



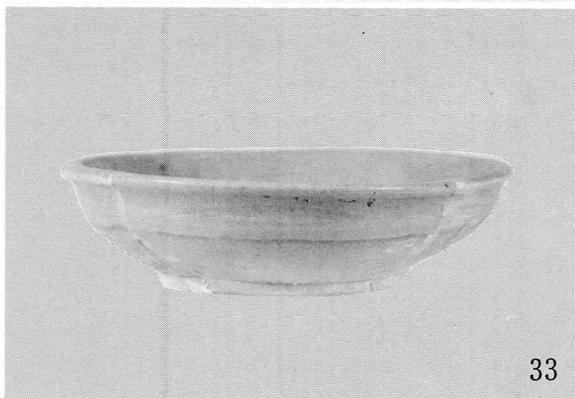
陶磁器 (9~16)



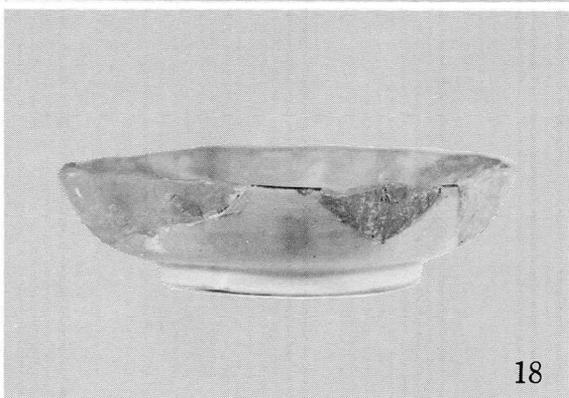
32



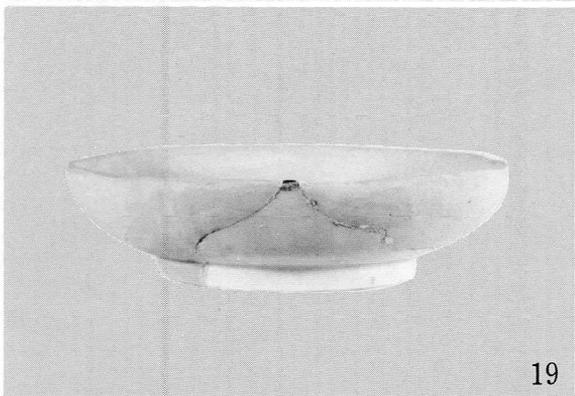
17



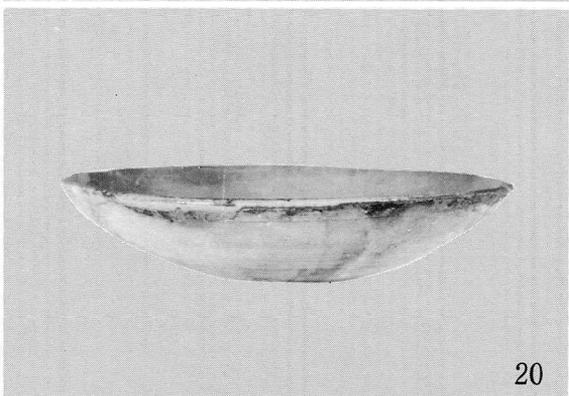
33



18



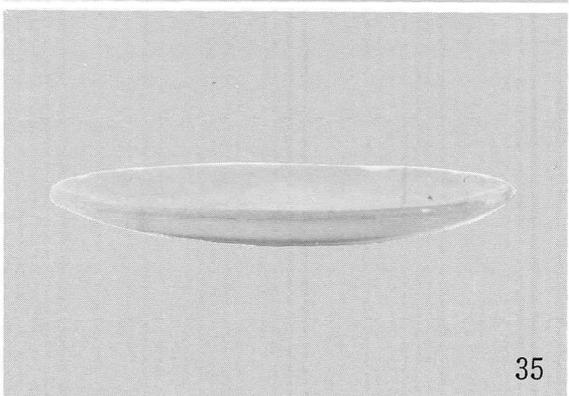
19



20

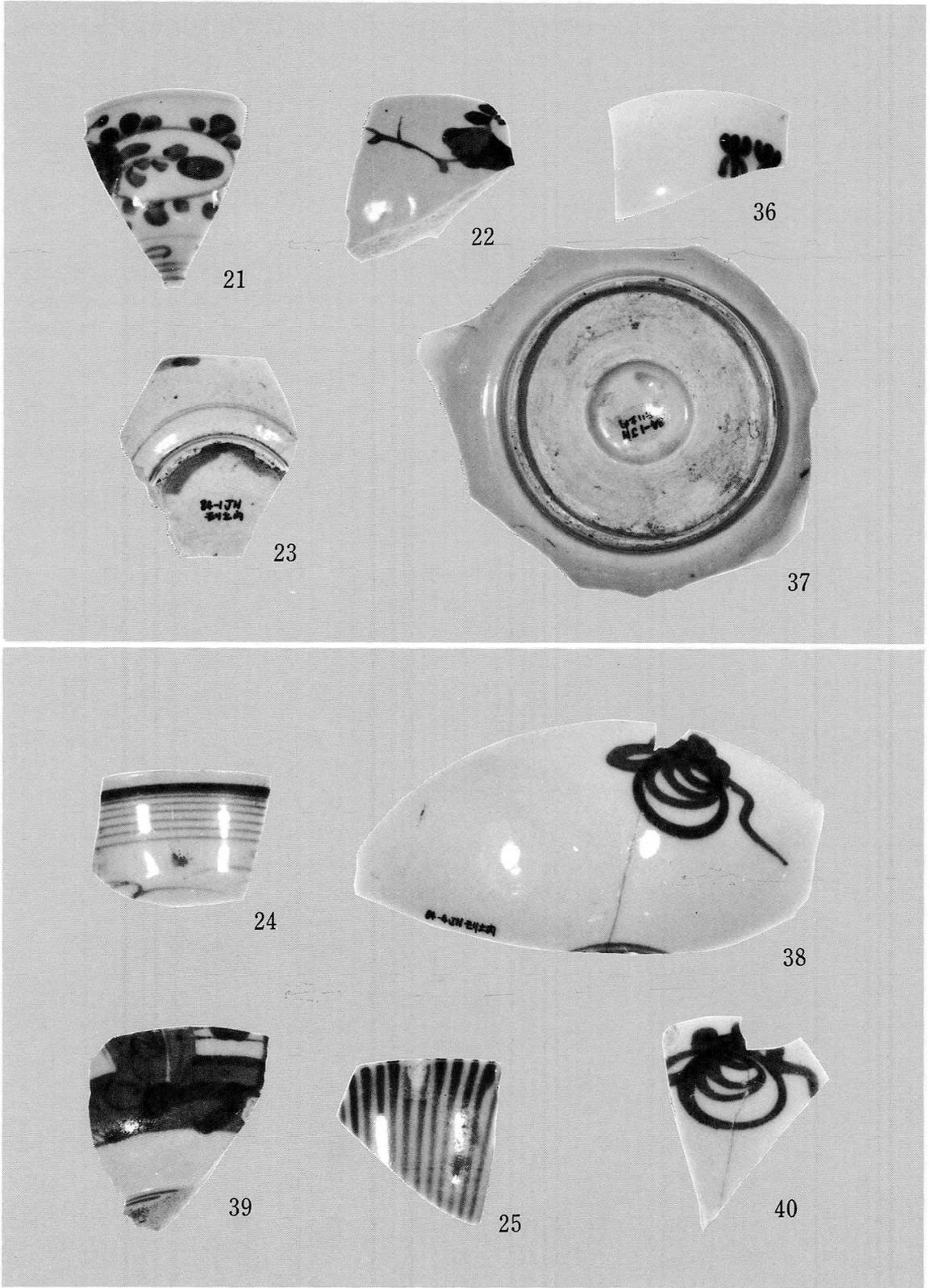


34

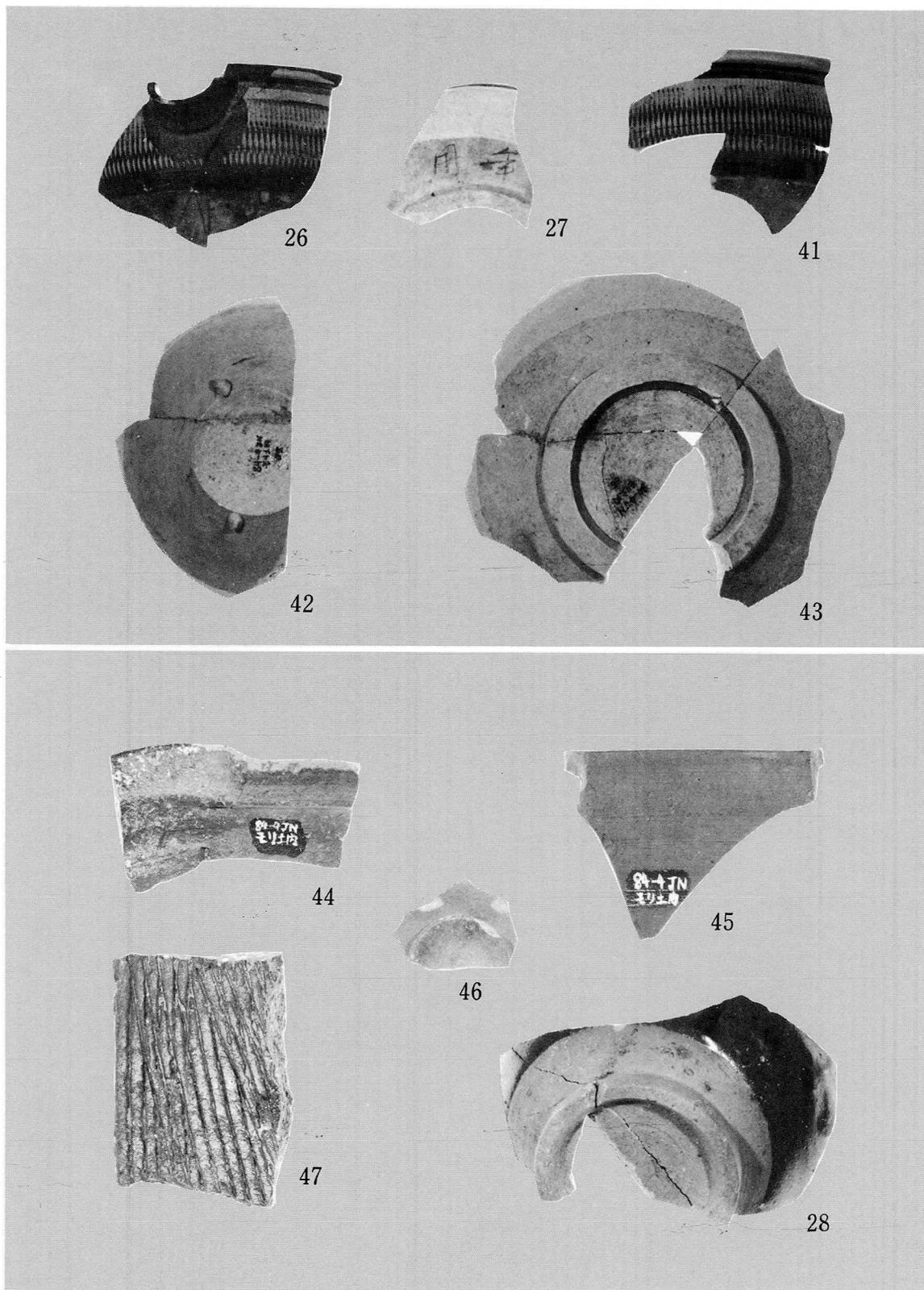


35

陶磁器 (17~20・33~35)、白磁(32)



陶磁器 (21~25・36~40)



陶磁器 (26~28・41~47)



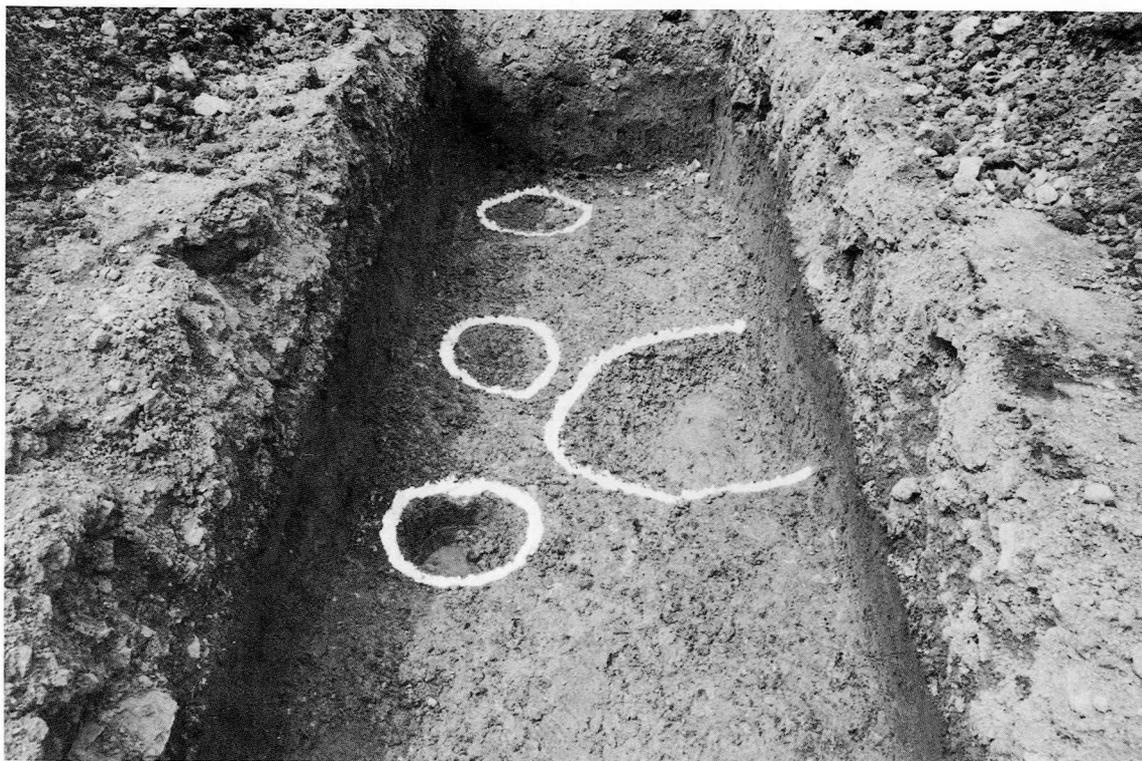
(1) 調査区全景

南西より



(2) 同 上

北東より



(1) 検出遺構

南西より



(2) トレンチ断面土層

北東より



(1) 調査区全景

南西より



(2) 同 上

北東より



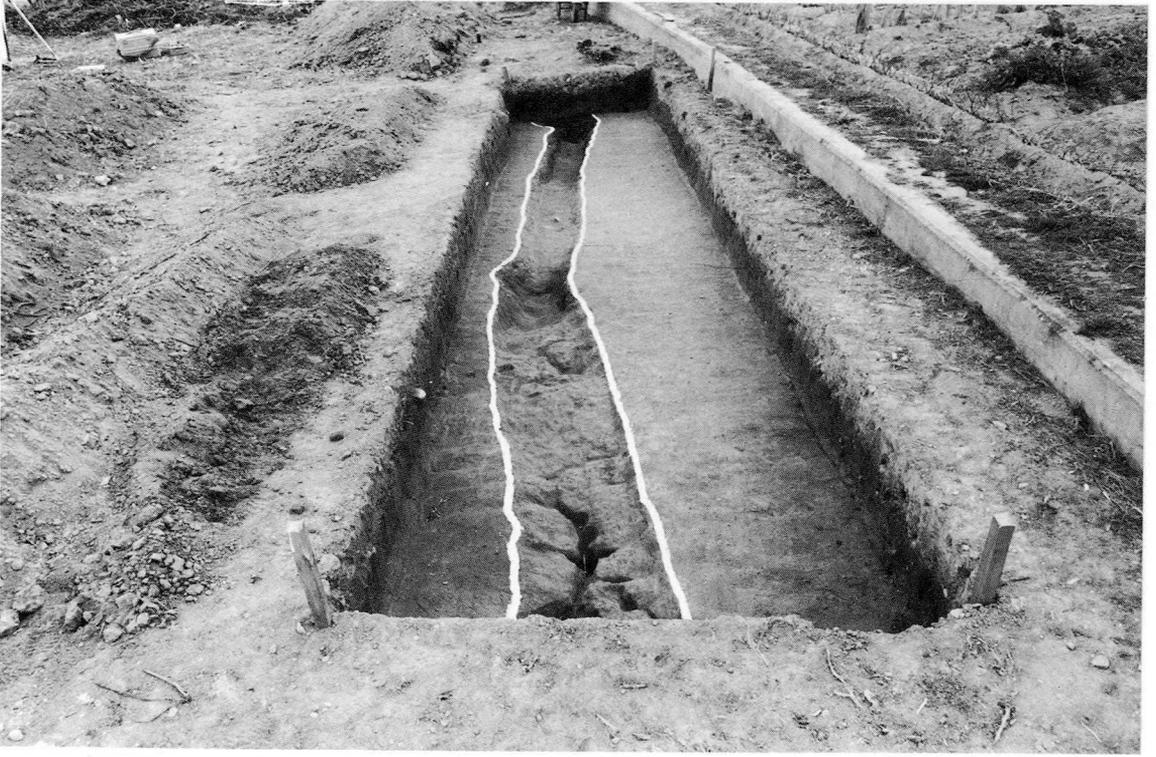
(1) 第1トレンチ全景

南より



(2) 同 上

北より



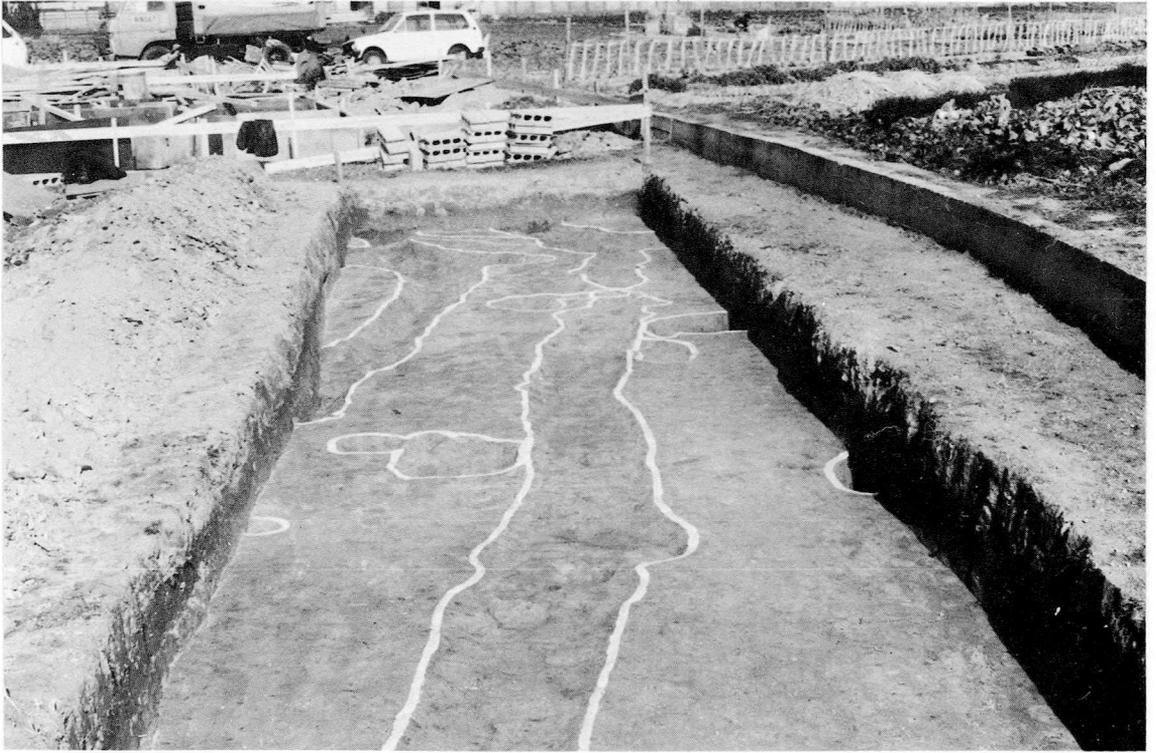
(2) 第2トレンチ全景

南より



(2) 同 上

北より



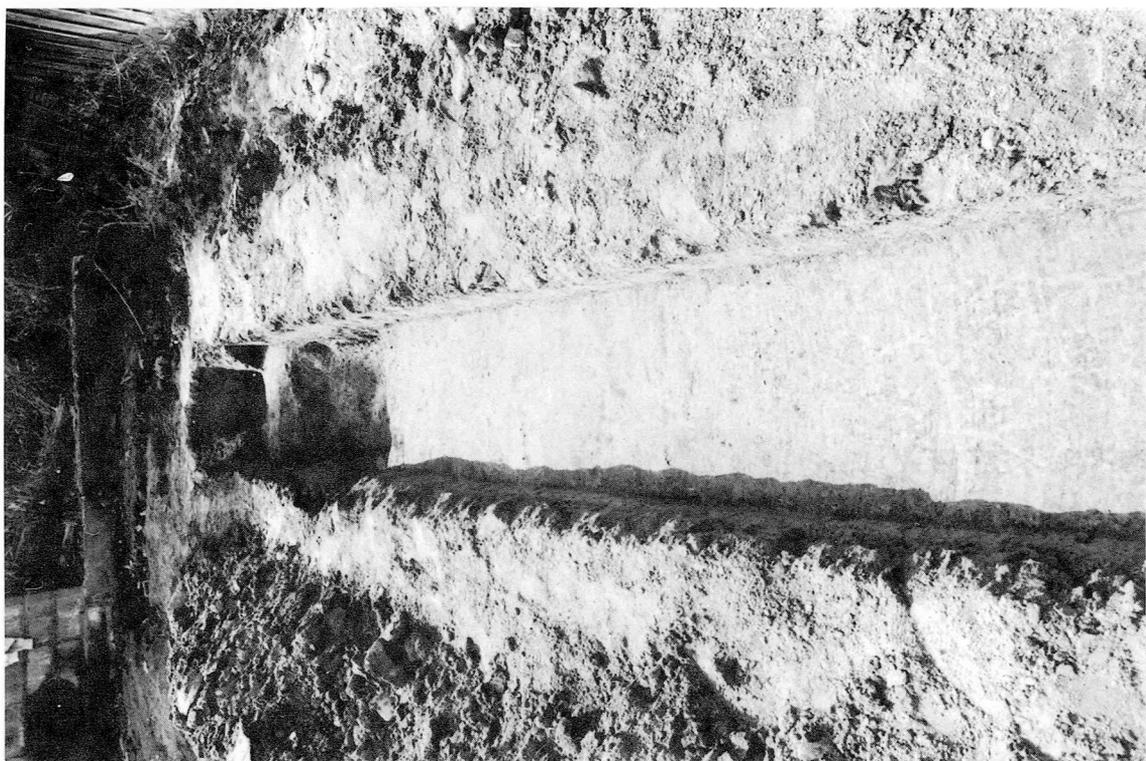
(1) 第3トレンチ全景

南より



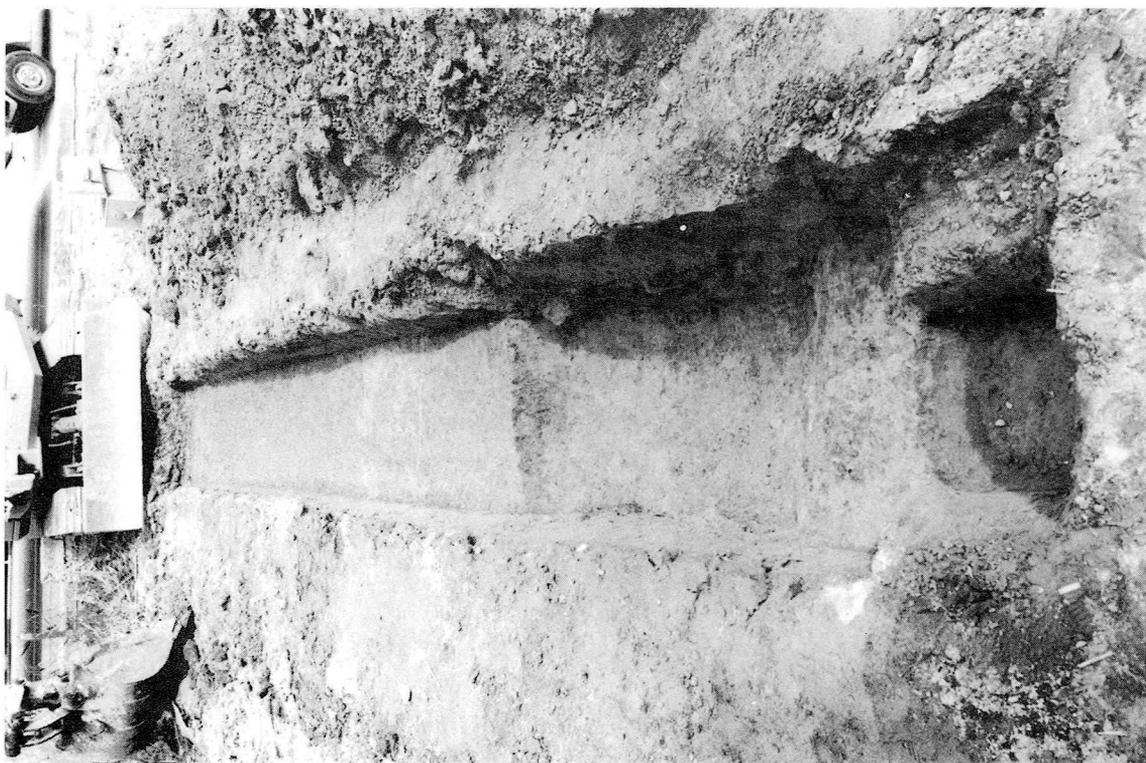
(2) 同 上

北より



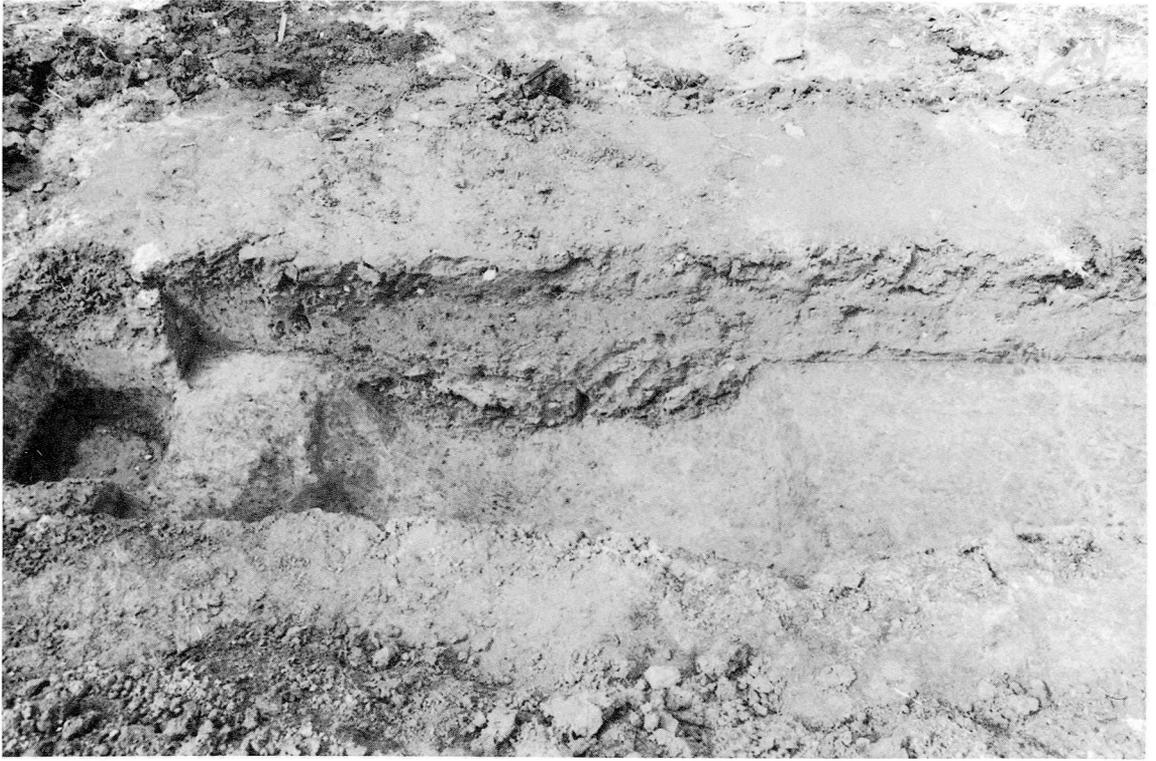
(1) 調査区全景

北より



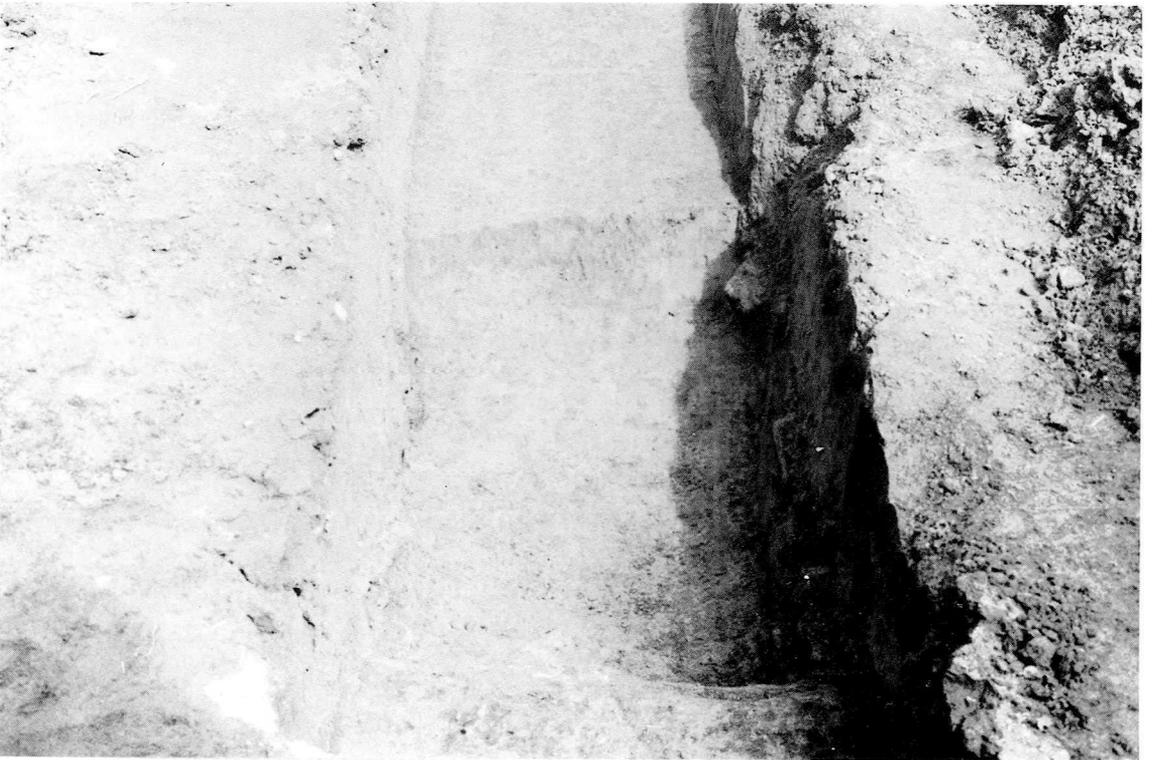
(2) 同 上

南より



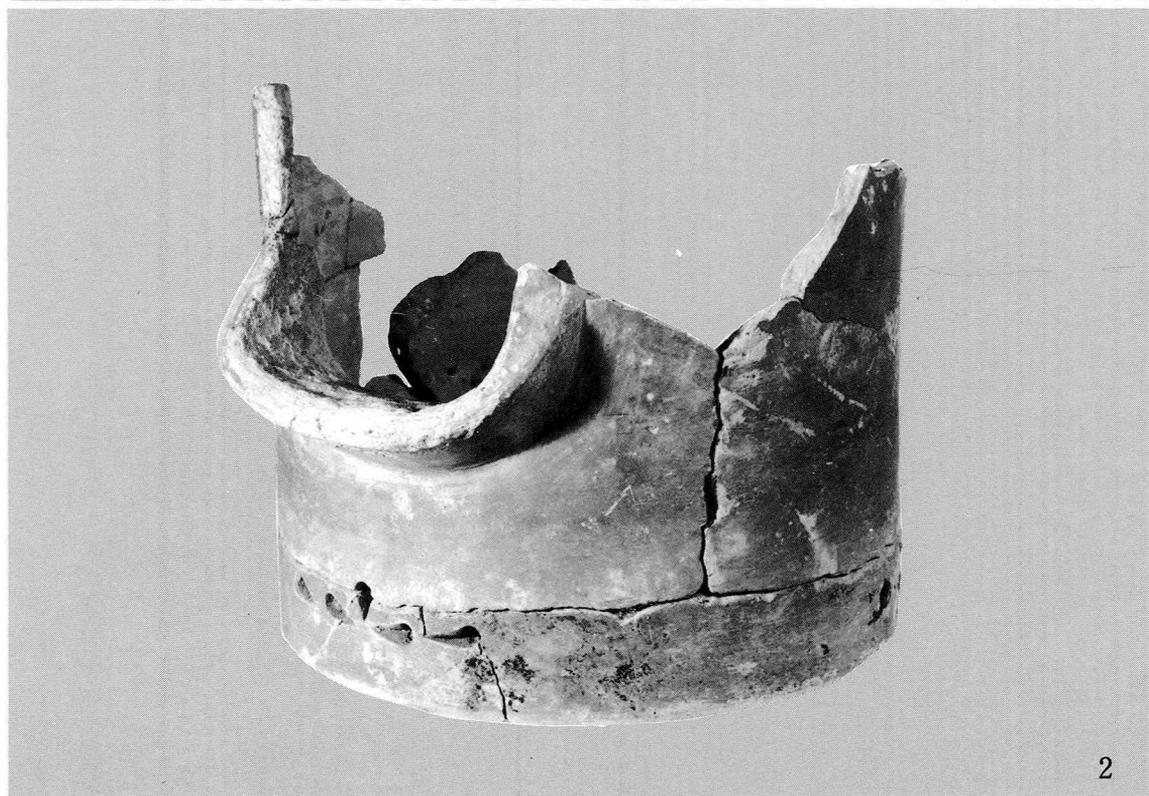
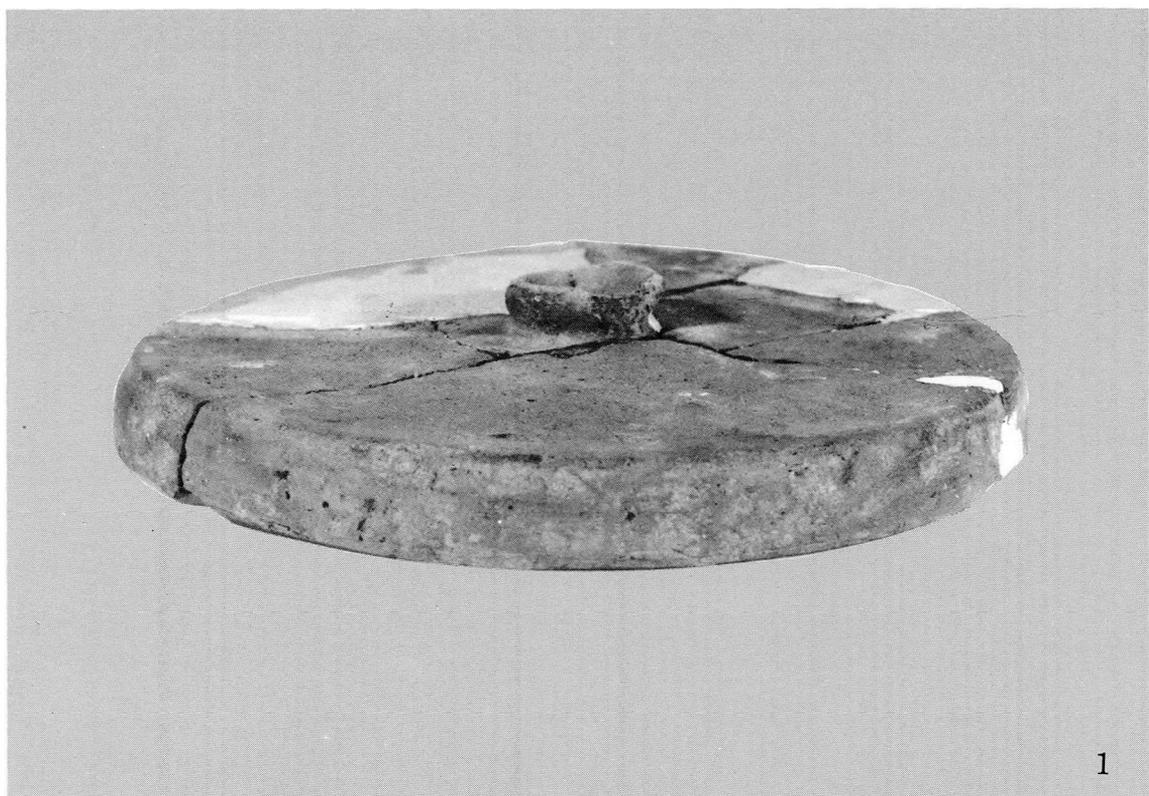
(1) 検出遺構

東より

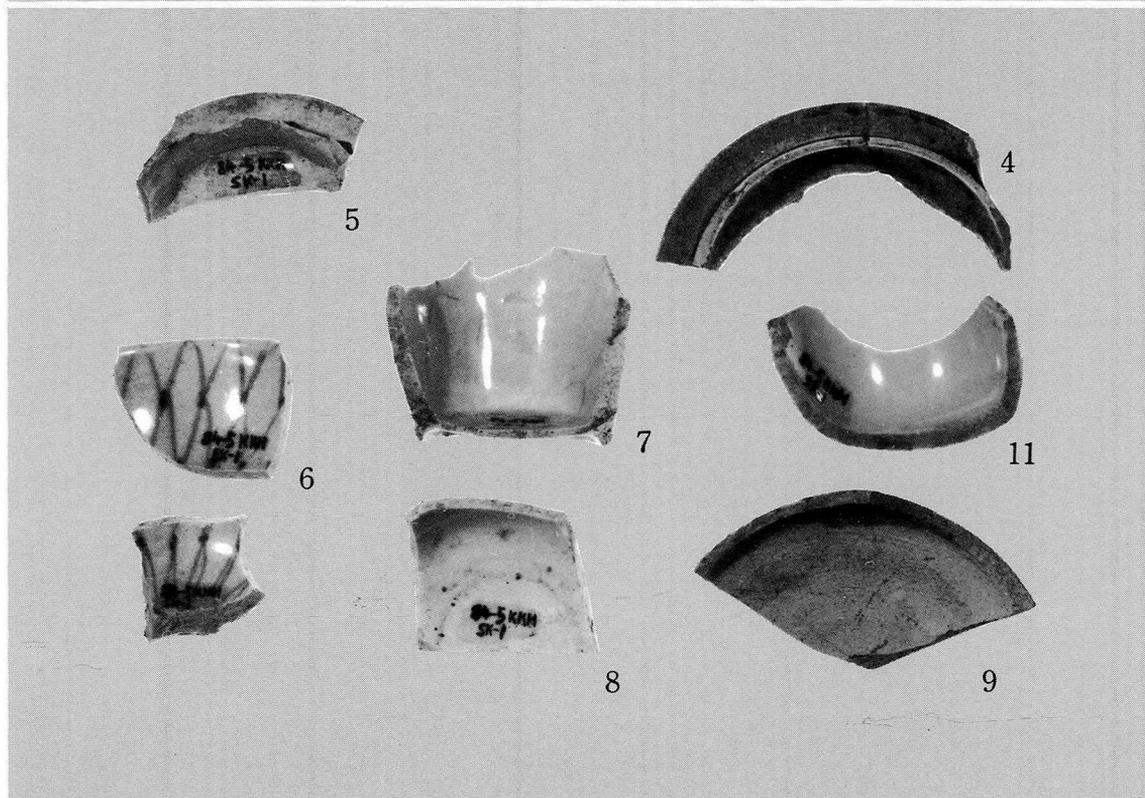
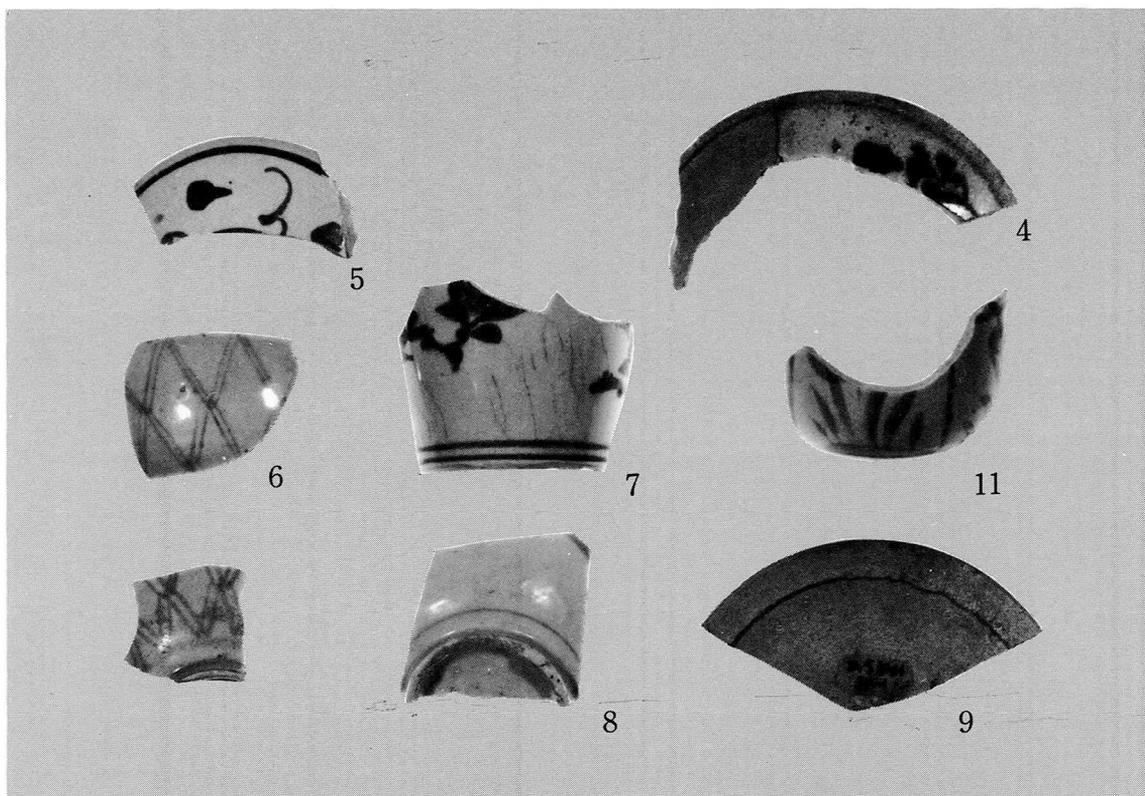


(2) 同 上

南より



土師質土器 (1・2)



陶磁器 (4 ~ 9 · 11)



(1) 第1トレンチ全景

南西より



(2) 同 上

北東より



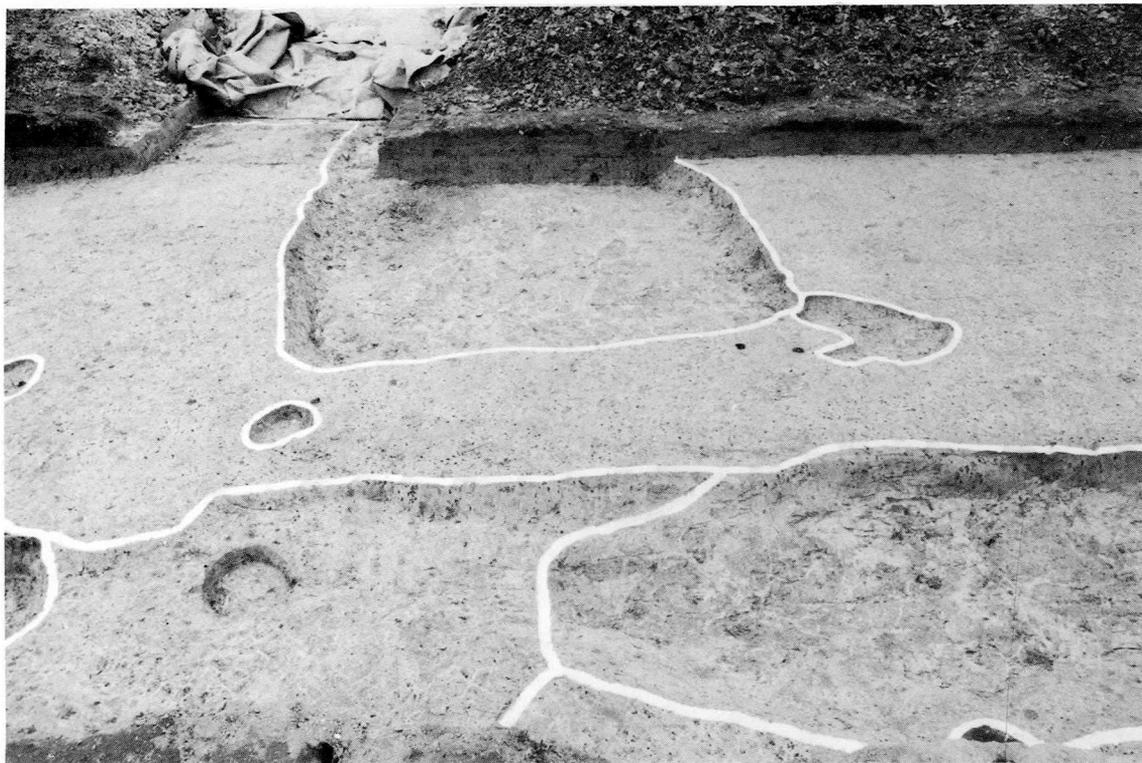
(1) 第1トレンチ

南より



(2) 第1トレンチ

北より



(1) 第1トレンチ土壌1

北西より



(2) 第1トレンチ溝1断面

南より



(1) 第2トレンチ全景

西より



(2) 第2・3トレンチ全景

北より



(1) 第4トレンチ全景

北西より



(2) 同 上

南東より



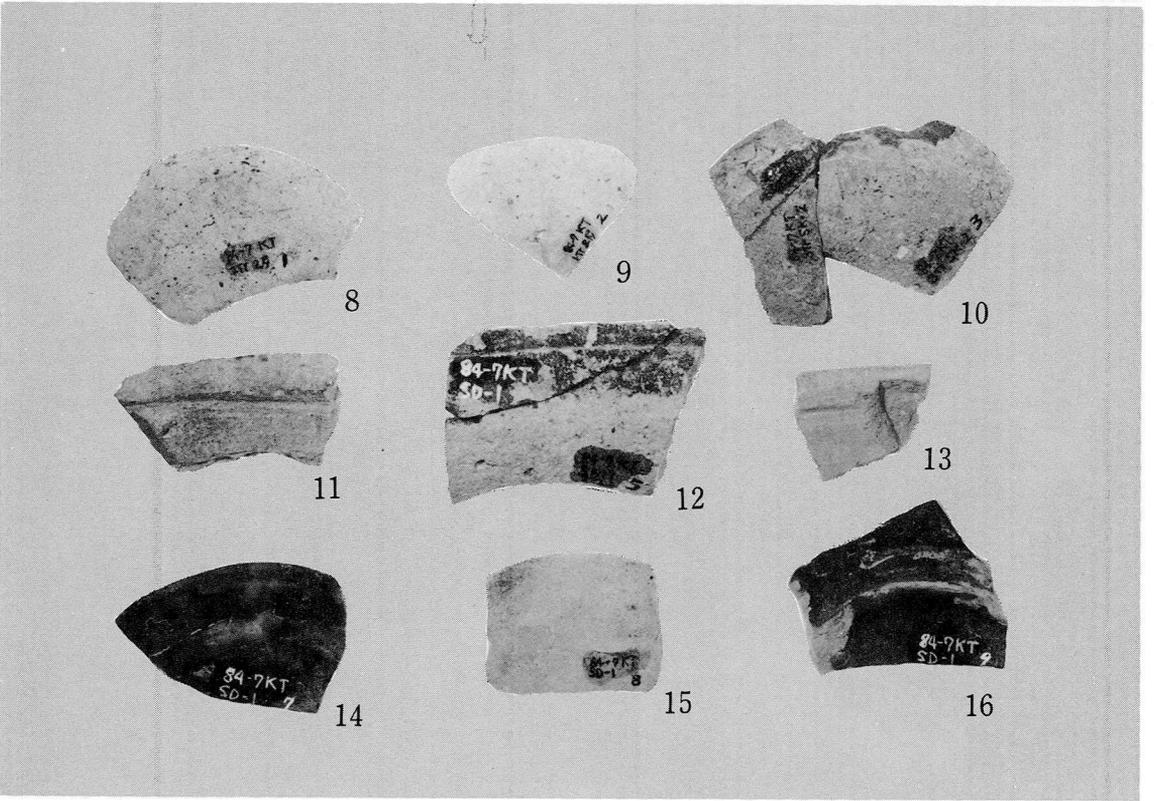
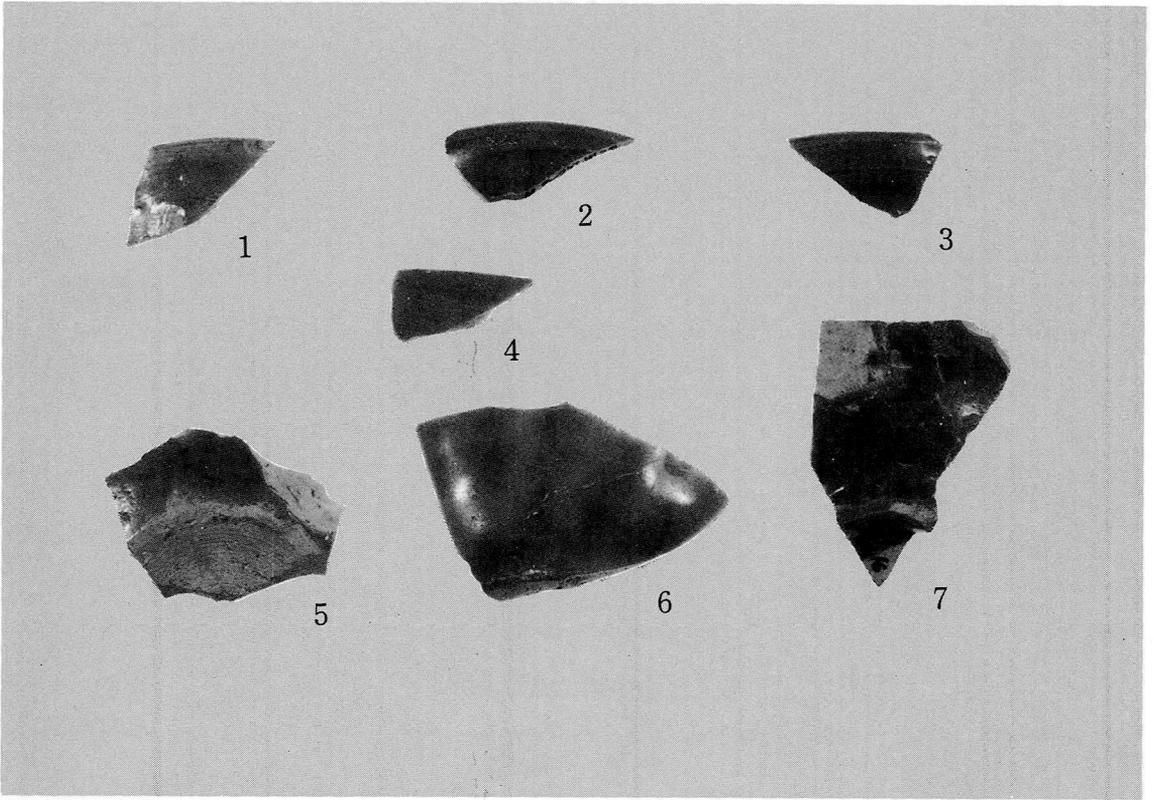
(1) 第5トレンチ全景

南東より



(2) 同 上

北西より



青磁(1～7)、土師器 (8～10・15)、陶器 (11～13)、瓦器 (14・16)

貝塚市埋蔵文化財調査報告第9集

貝塚市遺跡群発掘調査概要Ⅶ

印 刷 昭和60年3月25日

発 行 昭和60年3月30日

編集・発行 貝塚市教育委員会 〒597
大阪府貝塚市島中1-17-1

印 刷 ㈱帯谷印刷所
貝塚市北町19番14号